

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 153 June 2018

研究の最前線

◆ 2018年度夏期国際シンポジウム ◆

《移りゆく北極域と先住民社会：土地・水・氷》開催予告

今年度のセンターの夏期国際シンポジウムは、「移りゆく北極域と先住民社会：土地・水・氷」というテーマで開催します。センターでは、2016年にも、「ロシア極北：競合するフロンティア」と題して、北極域を対象とする夏期国際シンポジウムを開催しました。2016年のシンポジウムでは、ロシアの極北地域がターゲットとされましたが、今年は、ロシアだけでなく、アラスカ、グリーンランド、北欧なども視野に入れて、北極域を比較する視点も重視します。また、先住民をキーワードの1つとして、北極域における開発、環境、適応策、ガバナンスの問題を考察することも今回のシンポジウムの大きな特徴です。

2015年度から文科省の補助事業として北極域研究推進プロジェクト（ArCS）が開始されました。これは、国立極地研究所、海洋研究開発機構、北海道大学の3機関が中心となって2019年度まで実施されます。このプロジェクトでは、国際共同研究推進として、8つの研究テーマが実施されています。そのうち唯一の人文・社会科学系のテーマがテーマ7「北極の人間と社会：持続的発展の可能性」（実施責任者：田畑伸一郎）で、今回のシンポジウムはこのテーマ7が主催します。このテーマ7では、他の自然科学系テーマと連携して、北極における経済開発のあり方、環境と人間の相互作用、北極ガバナンスに関する研究を進めてきました。今回のシンポジウムでも、こうした観点から、北極の抱える問題を考えていきます。プログラムは、以下の通りです。多くの方々の参加を期待しております。[田畑]

On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arctic

会場：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター大会議室（403） 使用言語：英語

7月5日（木）

10:25-10:30 Opening Remark

10:30-12:00 Keynote Session

Chair: Shinichiro Tabata (SRC)

Gail Fondahl (University of Northern British Columbia) "Indigenous Land Rights in Russia: Legal Provisions and Local Realities"

Vyacheslav Shadrin (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North, RAS) "The Changing Arctic: Challenges and Answers to Indigenous Peoples"

13:15-15:15 Session 1. Livelihood and Network of People in Siberia

Chair: **Hiroki Takakura** (Tohoku University)

Yuka Oishi (Japan Society for Promotion of Sciences) "Fishing-Herding Complex and Ecological Adaptation of Khanty in Western Siberian Forest"

Vladimir Davydov (Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography [Kunstkamera]) "The Energy Regimes of the Arctic and Siberia: The Use of Resources by the Indigenous People in the Context of Socio-Economic and Ecological Change"

Olga Povoroznyuk (University of Vienna) "Living Along the Baykal-Amur Mainline: Resources, (Im)Mobility and Social Change Among Indigenous (Evenki) People"

Discussant: **Joachim Otto Habeck** (University of Hamburg)

15:30-17:30 Session 2. Greenland in the World, Denmark in Greenland: The Contemporary Society of Greenland and Its Future

Chair: **Minori Takahashi** (SRC/ARC)

Mark Nuttall (University of Alberta/Greenland Climate Research Centre) "Ice, Climate, and Society in Northwest Greenland"

Alyne Delaney (Tohoku University, AAU Arctic - Aalborg University) "'Fish Is Everything': The Significance of Fisheries in Greenlandic Communities and Culture"

Mininnguaq Kleist (Greenland Representation to the EU - Brussels) "Greenland's Political History: A Path Towards Statehood"

Discussant: **Shunwa Honda (Henry Stewart)** (Open University of Japan, emeritus)

7月6日 (金)

10:00-12:00 Session 3. Alaska's Subsistence Ways of Life in the 21st Century

Chair: **Shiaki Kondo** (CAIS)

Nobuhiro Kishigami (National Institutes for the Humanities/National Museum of Ethnology) "Bowhead Hunts As a Cultural Core Among the Contemporary Inupiat in Barrow, Alaska, USA"

Kenneth Frank (Gwich'in elder) "Maintaining Gwich'in Culture Through Stories and Caribou Anatomy Project: Observation of Climate Changes and Subsistence"

Thomas Thornton (University of Oxford) "Yield, Benefit and Flow in Alaska's Subsistence Economy: Rethinking Polanyi's Great Transformation Through Pacific Herring Fisheries"

Discussant: **Amy Lauren Lovecraft** (University of Alaska Fairbanks)

13:15-15:15 Session 4. Adapting into Arctic Realities: Bringing Knowledge into Action

Chair: **Fujio Ohnishi** (ARC)

Sean Desjardins (Arctic Centre, University of Groningen) "The Arctic Polynya-Oasis: Exploring a Niche of Precontact Inuit Resilience"

Amy Lauren Lovecraft (University of Alaska Fairbanks) "Anticipatory Governance in the Arctic: Researching the Future to Inform Community Adaptation Now"

Stephen J. Leisz (Colorado State University); **Yuko Shirai** (ARC) "Impacts of Telecouplings on Landscape Changes, Rural Transformations, and Urbanization Within the East-West Economic Corridor from Da Nang, Vietnam, to Khon Kaen, Thailand"

Discussant: **Keiichi Omura** (Open University of Japan)

15:30-17:30 Session 5. The Farthest Coast: Between Far East and Far North

Chair: **Mie Nakachi** (Hokusei Gakuen University)

Sergey Glebov (Amherst College) "The Political Ecology of a Pacific Colony: V. K. Arseniev and Population Politics in the Late Imperial Far East"

Eisuke Kaminaga (Niigata University of International and Information Studies) "To the North of the Northern Sea (Hokuyo): Japanese Fishery in the Bering Sea in the First Half of the 20th Century"

Andreas Renner (Ludwig Maximilians Universität - München) "Russia's Oldest Path of Globalisation: The Northern Sea Route"

Discussant: **David Wolff** (SRC)

◆ 【参加レポート】 2018 年 ABS サンアントニオ大会終了 ◆

2018 年 4 月 4 日から 7 日まで、Association for Borderlands Studies の年次大会が米国サンアントニオで開催されました。今回は新年度早々の開催となったため、日本からの参加者は少なく、本ユニットからは池直美講師と岩下が参加しました。ただし、最新号の *Eurasia Border Review* がボーダーとジェンダースタディーズの特集を組んでおり、ABS 関係者が多数投稿していたため、そのお披露目も含めて大会は盛り上がりました。



メキシコ側からみた対米国境フェンス（手前の絵が描いてあるもの）向こう側がトランプ大統領が計画中の新しいフェンスのサンプル あなたはどの壁のデザインが好きですか？

最終日の土曜日には、日本のこれまでのボーダーツーリズムの実践と研究の成果について報告もなされましたが、同日午後のセッションでは、メキシコ自治工科大学のウリセス・グラナドス教授が本ユニットとの協力で実施したメキシコ・グアテマラ国境の透過性の現状について最新のレポートをおこないました。現在、トランプ大統領は対メキシコ国境に壁を作り、南からの人の流入をメキシコの財政負担でまかなうよう要請しています。しかし実態は、ほぼ統制不能なメキシコ・グアテマラ国境を越え米国に向かう移民の流れを抑えているのは「バッファー」としてのメキシコであり、むしろトランプ大統領の方がメキシコにその代価を払うべきではないかという意見も出ました。なおグラナドス教授のレポートは KUBS の *Border Bites* 最新号に掲載されています。



かつては国境地域の「砦」：サンアントニオ

4 月 19 日には ABS の次期会長に選出され、カナダで Borders in Globalization (BIG) のプロジェクトを主宰するエマニュエル・ブルネイ＝ジェイ教授（ビクトリア大）が来道され、ユニットでのセミナーや BIG の特別シンポジウムが実施されました。[岩下]

◆ 共同研究員 ◆

2018 年度から、センター共同研究員になっていただく方々は以下のとおりです（五十音順）。特にことわり書きがない方々の任期は 2 年間です。なお、2017 年度からの共同研究員については、センターニュース第 149 号をご覧ください。[事務係]

共同研究員（一般）

青島陽子（神戸大）、天野尚樹（山形大）、荒井幸康、岡野要（1 年間）、岡部昶大（北大／1 年間）、越野剛、佐藤嘉寿子（帝京大／1 年間）、志田仁完（公益財団法人環日本海経済研究所／1 年間）、シュラトフ・ヤロスラフ（神戸大）、醍醐龍馬（小樽商科大／1 年間）、中村靖（横浜国立大）、永山ゆかり、日臺健雄（和光大）、兵頭慎治（防衛省防衛研究所）、堀江典生（富山大）、道上真有（新潟大／1 年間）、吉村貴之（早稲田大／1 年間）

共同研究員（地域比較）

前田しほ（島根大）

共同研究員（境界研究）

池ノ上真一（北海道教育大）、井竿富雄（山口県立大）、伊藤融（防衛大学校）、川久保文紀（中央学院大）、木山克彦（東海大）、黒岩幸子（岩手県立大）、佐藤学（沖縄国際大）、鈴木一人（北大）、田村慶子（北九州市立大）、花松泰倫（九州国際大）、福原裕二（島根県立大）、藤森信吉、古川浩司（中京大）、水谷裕佳（上智大）、三村光弘（公益財団法人環日本海経済研究所）、山崎孝史（大阪市立大）、山田吉彦（東海大）、屋良朝博

◆ **公開講座「ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題」開講** ◆

今年度のセンターの公開講座は、「ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題」と題して、北極をキーワードとして開講しています。気候変動、地球温暖化の影響を受けるなかで、北極域では急速な経済開発が進められようとしているわけですが、このような北極域の開発がロシアのみならず、世界や日本にとってどのような意味を持つのかについて考えます。北極域や地球全体の自然環境に対してどのような影響があるのか、そこに住む先住民をはじめとする住民の生活や文化にどのような影響を及ぼしているのか、国際社会や各国の政府はその開発をしっかりとコントロールできるのだろうか、こうした疑問に答えていきます（編注：公開講座は5月に終了しました）。[田畑]

日程	講義題目	講師
第1回 5月7日(月)	ロシア北極圏の経済開発	田畑 伸一郎 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター
第2回 5月11日(金)	ロシア極東～北極圏の自然： 北海道北方3000kmの自然と人	榎本 浩之 国立極地研究所 国際北極環境研究センター／ 総合研究大学院大学
第3回 5月14日(月)	あたらしい海の道： 北極海航路、過去、現在、未来	大塚 夏彦 北海道大学 北極域研究センター
第4回 5月18日(金)	シベリア最古の住民： 古アジア諸語を話す人々の言語と文化	永山 ゆかり 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター
第5回 5月21日(月)	北極域における パラディプロマシー： 北極政治を理解するために	高橋 美野梨 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター
第6回 5月25日(金)	シベリア北方少数民族の年金生活者： 村落におけるマイナーサブシステム と交換の役割	大石 侑香 東北大学 東北アジア研究センター／ 日本学術振興会
第7回 5月28日(月)	サハにおける人間と環境の相互作用	後藤 正憲 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター

◆ **ラーダ・ピラニク氏の滞在** ◆

ワシントン大学文化人類学科で教授をつとめるラーダ・ピラニク氏が、4月9日から7月8日まで日本学術振興会外国人招へい研究者としてセンターに滞在しています。ピラニク氏は著名なウクライナ研究者で、主に文化人類学および社会言語学の枠組みを用い、スル

ジク（ロシア語とウクライナ語の混成言語）研究で大きな成果を挙げてくれました。今回の滞在では「ウクライナとポーランドにおける英語の影響に関する比較研究」というテーマで研究を進めています。[野町]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 152 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

- 2月10日 サハリン・樺太史研究会 尾形芳秀（樺太郷土史研究会／全国樺太連盟）「忘れられた樺太島民：豊原空襲の死没者」；中山大将（京都大）「サハリンにおける日本人慰霊碑等の由来と現状 2016 年現地調査報告」
- 2月14日 ティムール・ダダバエフ（筑波大）「対中央アジア外交政策の国際比較：日本と中国の外交政策を中心に」（客員研究員セミナー）
- 2月15日 NIHU/UBRJ セミナー「日露バレーエ交流史：越境者たちが見つない白鳥の夢」 川島京子（早稲田大）「白系ロシア人エリアナ・パヴロバと日本初のバレーエスクール」；斎藤慶子（センター）「オリガ・サファイアの業績再評価：著作を中心に」
- 2月16日 第24回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 菊田悠（センター）「ミルジヨエフ新大統領の改革路線：変わりゆくウズベキスタン」
- 2月19日 共同研究班：「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究」報告会 吉村貴之（早稲田大）「体制転換期のアルメニア政治の『遠近法』」
- 2月21日 「比較植民地史」科研総括討論会 秋田茂（大阪大）「ヒトの移動（移民）と「帝国臣民」問題」；長縄宣博（センター）「反帝国主義の帝国：戦間期の『脱植民地化』、ソ連、人の流動」；前川一郎（創価大）「冷戦と脱植民地化：1960年代前半アフリカの歴史的文脈を事例として」；小沼孝博（東北学院大）「帝国に生きる“内なる他者”の自己表現：清朝のムスリム臣民の語りから」；河西晃祐（東北学院大）「大東亜共栄圏を考える視点」；平野千果子（武蔵大）「フランスにおける『黒人』」；宇山智彦（センター）「植民地における近代化をめぐる：中央アジアと他地域の比較」
- 2月22日 UBRJ/NIHU Seminar “Borderland People” Ed Pulford（センター）“The Limits of Koreanness: Korean Encounters at a Tree-way Border”；Assel Bitabarova（北大文・院）“Between Nationalization and Transnationalization: The Politics of Belonging among Dungans in post-Soviet Kazakhstan”
- 3月1日 月村太郎（同志社大）「バルカン諸国の政治変動と国際関係」（客員研究員セミナー）
- 3月3日 プロジェクト型：「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究に関する研究会 井上暁子（熊本大）「ポーランド語圏からの視点」；三谷研爾（大阪大）「ドイツ語圏からの視点」；阿部賢一（東京大）「チェコ語圏からの視点」
- 3月5日 北海道中央ユーラシア研究会第130回例会 松井佳世（北大農）「水道インフラの整備と住民の菜園植物種の選択：カザフスタンアラル地域の村の事例」；齋藤竜太（筑波大・院）「ウズベキスタンの複線の水ガバナンス：水消費者組合の視点から」
- 3月6日 北見論（神戸市外国語大）「二つの存在論と二つの世界戦争論：第一次世界大戦期におけるロシアの宗教哲学」（客員研究員セミナー）
「北鎮」とロシア：日本陸軍の対外戦略に見る旭川第七師団 関口高史（防衛大）「第七師団の戦略的価値の変遷：戦略環境に応ずる任務・役割の変容」；高本康子（センター共同研究員）「日本近代の記録メディアとしての旧陸軍資料：旭川第七師団資料を中心に」
- 3月7日 Transtextuality in Medieval Slavonic Literature 三谷恵子（東京大）“Significance of Textual Transcendence in Medieval Slavonic Literature: Apocalypse of Pseudo-Methodius and Legend of Twelve Fridays”；Ljubica Jovanovic（アメリカン・パブリック大、米国）“The Cyrillo-Methodian Project: The Role of This Translation in the Medieval Literature of the South Slavs”
- 3月9日 第25回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 ディビッド・ウルフ（センター）「第一次世界大戦と北東アジア」
- 3月13日 Sergey Kuznetsov “Два портрета времен восстановления российско-японских дипломатических отношений (1925 г.): посол Танака Токити и полпред Виктор Копп”（センターセミナー）

- 3月15日 木村護郎・クリストフ（上智大）「ヨーロッパ統合の障壁・資源としての言語：中欧国境地域の言語管理から」（客員研究員セミナー）
- 3月19日 Nikita Bochkarev（ヤクーツク科学センター、ロシア）“Competitiveness Inside the Russian Economy: Case of the Regional Insurance Market”; Tuyara Gavril’eva（北東連邦大、ロシア）“Sustainability and Survivability of the Arctic Communities”（センターセミナー）
- 4月19日 Emmanuel Brunet-Jailly（ヴィクトリア大、カナダ）“First Lessons from the Borders in Globalization Research Program”（UBRJ セミナー）
- 4月23日 Laada Bilaniuk（ワシントン大学、米国）“Anglicization and the Post-Soviet Transformation of Discourse in Ukraine”
- 4月26日 田中利和（東北大）「越境する地下足袋：フィールドワーカーとアフリカによる新たな履物文化協創の試み」（NIHU/UBRJ セミナー）
- 5月6日 ツァゲールニック・タッチャナ（北大教育・院）、清沢紫織（学振特別研究員）「ペラルーシ語入門講座 第1回」

人事の動き

◆ 山村理人教授：定年退職 ◆

1993年9月に茨城大学農学部から移られてセンター助教授となり、のち1997年に教授に昇任しました。体制転換後の旧ソ連および東欧諸国の農業構造の問題を比較組織・制度研究の視点から分析してきたほか、1995年からの重点領域研究では企業の動態分析にも研究領域を広げ、また中央アジアにおける環境問題と農業の関連についても研究をおこなってきました。[仙石]

◆ 越野剛准教授：退職 ◆

2010年4月にセンター助教に就任したのち、2013年に准教授となりました。ロシア文学およびペラルーシ文学を専門とされ、2018年3月に論文「ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史」で博士号を取得しました。他方で氏はロシアにおける帝国やアジアの表象、戦争の記憶といった方向にも研究の方向を広げ、中国研究者やベトナム研究者とも共同研究を推進してきました。[仙石]

◆ 安達大輔氏の就任 ◆



安達大輔氏が4月1日付で准教授として着任されました。氏は1975年生まれ、2000年に東京大学文学部言語文化学科を卒業されたのち、同大学大学院人文社会系研究科（欧米系文化研究専攻）に進学されました。大学院在籍中にはロシア国立人文大学に留学されたほか、鈴川基金奨励研究員（当時：現中村・鈴川基金奨励研究員）としてセンターに滞在されたこともあります。大学院修了ののちは、センターで学振特別研究員（PD）をなされたのち再度ロシアに留学され、帰国後は東京大学や一橋大学、東京理科大学などで教鞭をとっておられました。

専門はロシア文学のほか表象文化論、メディア論および身体論と幅広く、それに合わせてこれまでの研究も、主たる対象である文学作品とメディアの関係からみたロシアの言語文化のみならず、ゴーゴリを中心とするロマン主義文学と同時代のメディアの比較、カラムジン

の創作活動を貫く文化間翻訳の問題、ソ連初期のピアノ演奏理論からみた当時の身体観など、幅広い領域に目を向けたものとなっています。今後センターでは、研究面においてスラブ・ユーラシアと他地域との比較研究をおこなうこと、教育面では高度な専門性と学際性を兼ね備えた「スラ研らしい」研究者を育てることを目標とされているとのことです。[仙石]

◆ 非常勤研究員紹介 ◆

伊藤 ^{まさる} 愉 2018年4月に着任

研究テーマ：1920年代後半ロシア演劇における「ファクト」の概念と方法論的展開の考察

村上 ^{ともみ} 智見 2018年4月に着任

研究テーマ：シルクロードの服飾に関する研究：草原の道出土品を中心に

神竹喜重子さんと宗野ふもとさんは、他大学に移られました。[事務係]

◆ 2018年度の客員教授・准教授 ◆

公募していました客員教授・准教授は審査の結果、次の8名の方々をお願いすることになりました。[事務係]

氏名	所属	研究テーマ
伊藤 庄一	一般財団法人日本エネルギー経済研究所戦略研究ユニット	米国シェール革命とロシア：北東アジア・エネルギー安全保障の新展開
加藤 有子	名古屋外国語大学外国語学部	ポーランド未来派再考：同時代のロシア、欧米の文学・芸術動向との関係
セルゲイ・ゴルノフ	—	移行するユーラシア国境：国境を越えた協力の有効なパターンを求めて
ティムール・ダダバエフ	筑波大学人文社会系	日本の対中央アジア外交政策と援助：その戦略に関する多角的分析
徳永 昌弘	関西大学商学部	「ロシア語圏市場」における外国直接投資に関する研究
ブフ・アレクサンダー	ヴィクトリア大学ウェリントン歴史・哲学・政治学・国際関係学部	Strategic Alignment in Northeast Asia: A View from Down Under
松澤 祐介	西武文理大学サービス経営学部	中東欧諸国の Europeanization とネオリベラリズム
森下 嘉之	茨城大学人文社会科学部	20世紀後半中東欧における知的制度に関する一考察：制度としての歴史学と民俗学／フォルクスクンデ／エトノグラフィエ

◆ 事務職員 ◆

石戸谷 護 事務補助員 2018年4月に着任 (事務室)

児島 和子 事務補助員 2018年4月に着任 (図書室)

田形みどり 事務補佐員は退職されました。

太田 治子 事務補助員は退職されました。

[事務係]

スラブ・ユーラシア研究センター：ポスト共産主義諸国の専門家のための知の拠点

イリヤ・ヴィクトロフ(ストックホルム大学／センター 2017 年度特任講師)



筆者 札幌の繁華街で

2017年の7月から9月にかけて、私はスラブ・ユーラシア研究センター（SRC）に外国人特別研究員として3ヶ月間滞在しました。それは面白い出会い、新たな研究上の人間関係、バラエティ溢れる専門的活動に満ちた、素晴らしい時間でした。私はいつも日本と日本の伝統文化に多大な関心を抱いてきました。今回は5回目の訪日でした。2015年に幕張で行われたICCEES世界大会に参加した際、私は日本の学術コミュニティが、ロ

シア研究関連のみにとどまらず、ポスト共産主義研究の見地から提供すべき多くのものを有しているのを目にしました。これがSRCの外国人研究員プログラムに応募した主な理由でした。札幌に来る以前は、ロシアの政治経済の専門家である私は、研究の発展の可能性について大いなる期待を抱いていました。こうした希望はSRCの滞在中に完全に実現しました。

外国人特別研究員に提供されるSRCの労働環境は、作業スペース、コンピューター、そして全体的な研究インフラの面において素晴らしいものでした。滞在中に直面したあらゆる実際的な問題、特に私の日本語の知識の不足に関するものは、SRCの事務職員の方々によってまったく円滑に処理されました。特に、これにつきましては、私は外国人研究員プログラムのマネージャーである大須賀みかさんに大変に恩義があります。北海道大学が提供する家族向けの宿舎もまた、素晴らしいものでした。私はそれを高く評価します。

より重要であったのは、SRCがロシアとその他のポスト共産主義国に関心を持つ研究者にとって、本物のミーティング・ポイントとして機能してきたのをこの目で確認したことです。まず初めに、私は毎年開かれるSRC主催の夏期シンポジウムに参加する機会に恵まれました。2017年の、この記憶すべきイベントは、中国・ロシアの協力とその容易ならざる歴史的背景をテーマに掲げました。日本、ロシア、中国、インド、そしてその他の国々の研究者がこの問題について議論するために集まりました。それは、私たちが西ヨーロッパで抱きがちな問題の見方と比べて新鮮な視点を提供してくれたために、忘れがたい経験になりました。ロシアの政治経済の専門家として、ロシア極東地域を代表する研究者と出会ってお話することは非常に助けになりました。それは、ヨーロッパの、あるいはモスクワに拠点を置いているロシア国内の研究所にとってさへほとんど知られていない、当地域で起きていることの知識を更新するユニークな機会でした。SRCのスケジュールは様々な領域のセミナーや発表といった活動に力を入れていました。常にこのセンターで何かが起こっているのです。私自身も、SRC滞在の一環として、ロシアの政治経済の関する発表を2度行いました。

それぞれの外国人特別研究員は、アカデミック・アドバイザーを迎えます。それはSRCのスタッフのうちの一りで、研究員をSRCの学術生活へと導き入れてくれます。アドバイザーである田畑伸一郎教授の親切なもてなし、滞在中に欠くことのできない助力をもたらした田

畑朋子さんに、私はたいへん感謝しています。油本真理さんとはロシア政治について、そしてディビッド・ウルフ教授とは現代ロシア・アメリカ史の考え得るあらゆる視点についてアカデミックな討論をしましたが、それらは私のSRC滞在を充実した経験にしてくれました。

私は格別の感謝を、SRCの素晴らしい図書館と、助力してくださった兎内勇津流さん先頭とする図書館スタッフの方々に捧げなければなりません。疑いなく、この図書館は東欧とポスト・ソビエト空間についての高度の専門性を有した、世界でも最もよく管理された専門図書館の一つです。私は北海道大学とSRCが、我々の分野における知識の倉庫を維持しているその努力を称賛します。特にポスト社会主義国や西ヨーロッパの大学でしばしば共通している、こうした専門図書館を軽視する近年の否定的な傾向と比較すればなおさらです。もし仮にこの図書館が休日にも開かれていたなら、私は仕事の時だけでなく自由な時間にも、ここに収集されたすべての素晴らしい文献や雑誌を読んで楽しんで過ごせたのにと感じてしまいます。

もう一つの私にとってありがたい恩恵は、滞在期間中にほかの外国人研究員と交流ができたことです。好奇心をそそる会話、アイデアの交換、ニュースの共有、そして単純にコーヒー・ブレイクのひと時を、イルクーツク国立大学のセルゲイ・クズネツォフ教授やウプサラ大学のミハイル・スロフ博士、アダム・ミツケヴィチ大学のヤロスラフ・ヤンチャク博士、アリゾナ州立大学のダンコ・シプカ教授と共に過ごしました。

私はロシア政治経済の研究者に会うために、日本の大学を訪れる機会を最大限利用しました。上智大学には安達祐子教授に会うために赴き、最近のロシア経済の傾向についての講義を、彼女が受け持つロシア語学科において行いました。私はまた、京都大学経済研究所とも交わることができ、そこでは溝端佐登史教授が親切にも私の研究セミナーを主催してくれました。これらの交流すべてが、私の将来の研究計画において非常に重要な一部になるでしょうし、うまくいけばスウェーデンの大学が主催する研究プロジェクトに日本の仲間を加えることにも繋がるでしょう。日本には、一人の研究結果が共有され、一人ひとりが耳を傾けられ、最大限の興味関心をもって聞いてもらえるという、素敵な学術文化があります。



おたる潮まつり

札幌と北海道にも休日を楽しむ機会が満ちています。札幌は日本の大都市に典型的な、想像しうるだけのモダンな快適さを備えた活気あるメトロポリスです。京都や東京と比べると、札幌は非常に若い都市であるにもかかわらず、見事な風景の公園、北海道神宮、北海道開拓の村、それから世界レベルの素晴らしい企画展示を行っているミュージアムなど、観光の選択肢をたくさん提供してくれます。北海道大学のキャンパス自体も素晴らしい名所であり、長時間の労働の後にリラックスできる空間です。札幌から電車に乗ってすぐの場所にある小樽の港は、私が本当に気に入った場所でした。歴史ある街路や建物、愛嬌のある運河、美味な海産物、コーヒー・ショップのユニークな文化のために、小樽はとても心躍らせる目的地なのです。私は4回行きましたが、それでも小樽で体験したいと思う全てを味わったとは言いきれません。それから、全ての旅行者向けの看板にはロシア語で情報が書かれていて、この海に面した日本の素晴らしい町を訪ねようとするロシア人にとって非常にありがたいもて

なしです。北海道は美しい自然公園があることで有名で、それらは札幌からの手軽なバス旅行の範囲で行くことができます。アイヌ文化の伝統的な遺産も見逃せません。アイヌの村々や数多くある興味深い博物館を訪れてみましょう。こうした博物館の一つは、北海道大学の植物園の中にもあるのです。

他のロシアやユーラシア地域の専門家に対し、SRC・北海道大学に滞在する機会を一考するよう推奨するかと問われたら、私の答えは完全にイエスです。日本は、我々の専門分野におけるこのような素晴らしい学際的なセンターを創設し、維持していることを誇るべきでしょう。このセンターは我々の対象とするポスト共産圏の経済、政治、文化、歴史を研究する国際的なコミュニティにとって、真のミーティング・ポイントとしての役割を見事に果たしているのです。(英語から上村正之訳)

忘れられない、驚くべき日本：研究者の覚え書き

アジム・マリコフ（ウズベク共和国科学アカデミー歴史研究所
／センター 2017 年度特任教授）



筆者

遠い昔の 1980 年代、日本についての私のイメージは映画やアニメ、テレビ番組などを通して形成されました。日本はおとぎの国のように、遠くて到達できないという気がしていました。

画期的な出来事となったのは 1991 年にウズベキスタンが独立を宣言したことでした。1992 年 1 月 26 日にウズベキスタンと日本の外務大臣の間で行なわれた書簡の交換が、両国の協力関係の出発点となりました。現在ウズベキスタンでは 12 社の日本企業の代表部が開かれていて、10 社の合弁企業が成功裡に活動しています。特に、ウズベク自動車工業 (Uzavtosanoat) 株式会社と日本のいすゞ自動車株式会社の協力関係が確立されていて、そのおかげでサマルカンドでは数万台のバスとトラックが製造されています。

東京に卓越した詩人のアリー・シール・ナヴァーイーの像を建てたことと、タシケントに日本庭園を造ったことは、日本人とウズベク人が互いを尊敬していることの鮮やかな現れとなりました。有名な考古学者の加藤九祚氏はウズベク人の古代遺産の研究に大きく貢献しました。

1993～95 年に私はナヴァーイー記念サマルカンド国立大学の歴史学部の学生にアジア諸国の近代史について講義をしていましたが、その中でもいくつかの講義を日本史について行なったことがあります。セミナーでは学生たちと一緒に徳川幕府や明治維新、日本の社会、そして日本のすばらしい文化などに関する諸問題を議論していたことが記憶に残っています。

私は生まれ育ったサマルカンド——それは古代国家ソグディアナの旧首都でもあります——の歴史を長年に渡って研究しています。ソグド人は、進取の気性を持ち、シルクロードの広範囲なルートで交易を行っていました。8 世紀に、その一人の商人が日本まで来たこともあります。

私は様々な国で在外研究をし、オーストリアや米国、フランスとドイツなどの図書館で作業する中で、中央アジアの歴史と文化に関する文献を研究してきました。日本人研究者の中では特に、小松久男、宇山智彦、森本一夫、河原弥生、帯谷知可教授らの研究に関心を持ちました。

ウズベキスタンと日本の間では文化的・人的交流が拡大しています。ウズベキスタンの独立後、ウズベク人の学生が日本で教育を受けて働き、日本人の学生はウズベキスタンで研究調査をできるような条件が作られました。

2017年に私は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）の援助のお陰で、日本に来て研究者と交流する機会を与えられました。

日本の大学では数多くのウズベキスタンの学生が教育を受けています。現在、北海道大学経済学院にはウズベキスタンからの2人の学生がいます。札幌に来てから彼らと会い、現在は専門性を高め、何世紀にも渡る豊かな日本文化に触れる大きなチャンスが開けているということについて話し合いました。そして他の仲間たちも誘ってウズベク人の伝統的な料理であるピラフを楽しみました。

私の研究に学術的サポートをし、そして東京大学、筑波大学、京都大学へのお出張を企画してくださった宇山智彦教授に感謝致します。それらの大学では、中央アジア・ムスリムの「聖なる家系」の歴史と現在に関する諸問題を中心に報告をしました。特に筑波大学では、現代のブハラ・オアシスにおける「聖なる家系」の集会的記憶について時間的にも長く、充実した報告となり、議論が一時間以上も続きました。これらの議論は、私の研究の内容を方法論の側面から深めると同時に、中央アジアの「聖なる集団」の過去と現在についてのモノグラフを今後執筆する上でも示唆となり得る、新たなアプローチを示してくれました（聖なる集団というのは預言者ムハンマド、初期のカリフや、スーフィー指導者の子孫たちのことを意味します）。

筑波大学のセミナー後にホテルに帰る途中で買物をするためにコンビニに寄りました。店員さんたちが私の生まれ育ったサマルカンド出身であることを知って、私は驚きました。彼らに会って古代のソグド人の、異文化を学ぼうという志向、様々な民族と分かり合う能力を思い出しました。ソグド人の高い寛容性、彼らが持っていた進取の気性は、現在もその子孫たちに保たれていると思います。

日本とウズベキスタンの26年に渡る関係を振り返れば、日本にはウズベク語を自由に操り、ウズベキスタンの歴史と文化をよく知っている史料学者、歴史家、人類学者などの世代が登場したと言えます。彼らの中には数年に渡ってウズベキスタンの様々な地域で現地調査を行ない、あるいは文書館や図書館などで保管されている史料や手稿などを分析してきた研究者もいます。私には、植田暁氏や宗野ふもと氏、和崎聖日氏、菊田悠氏と齋藤竜太氏などのような才能ある研究者と交流する機会がありました。そして、私の研究には長縄宣博教授の貴重な助言も参考になりました。

SRCは中国やロシア、カザフスタン、クルグズ共和国を含め、さまざまな国の研究者と出会い、歴史と現在の多様な問題を議論できるすばらしい場所です。

特に、強い印象を与えてくれたのはSRCの充実した図書室でした。ここではウズベキスタンでは手に入れられない多くの本や論文集を見つけることができました。電子出版や雑誌などへのアクセスのお陰で研究を容易に進められました。自分が知らなかった新しい日本人研



ウズベキスタンのサマルカンドにある旧マドラサ（イスラーム学校）の建物

究者を発見し、彼らの研究を読むこともできました。図書館には民族アイデンティティ、ネイション形成、ロシア史と中央アジア史に関する重要な文献及び現代とソ連時代以前の定期刊行物などが揃えられています。

日本には実に多様な美術館・博物館があります。日本のどの地域にいても美術館やギャラリーなどを訪問できる機会があり、そこでは地元の特徴がある芸術作品はもちろん、外国からの芸術作品も楽しめます。ある美術館では遠い8世紀のソグドの手芸品が展示されています。豊富な所蔵品のある美術館の一つとして、小山美秀子氏（1910 - 2003）が大切に作り出したMIHO MUSEUMがあります。MIHO MUSEUMでは全ての人類に属する宝物が保管されています。私は特に中東から持ち込まれた展示品に興味を持ちました。この美術館はアフガニスタンで見つけられた古代バクトリアの有名な金製品を購入したのです。私は今回残念ながらMIHO MUSEUMを訪問する時間はありませんでしたが、次回は是非行ってみたいと思います。

日本での5ヶ月の滞在は、仕事と興味深い出来事で充実した時期になりました。特に、日本人の礼儀作法の文化、彼らの相互の丁寧さと親切さ、思いやりと開放性に驚きました。そして、事務的問題を解決する上でお世話になった大須賀みかさんと中嶋奏子さんに感謝いたします。

京都では徳川家の将軍の屋敷であった二条城が強い印象を与えてくれました。二条城の広間にいた時、私の目の前に中世の日本の情景や城の中で行なわれていた儀式が浮かんできました。かつて将軍について講義をしていた私は、ようやくここに来て歴史に触れたのです…。

私は和食が好きで、パリやベルリン、ニューヨーク、ウィーンなどのどこでも日本料理のレストランを探していました。日本の料理は風味が多様で、選択肢も豊富で、健康によいことに特徴があると思います。一番美味しい寿司は、間違いなく札幌で味わったものです。

札幌の市内と郊外にある観光スポットの見学も特別な印象を与えてくれました。小樽市に旅行に行き、特色のある街路、有名な蒸気時計などを楽しみました。日本全国に毎年多くの人が訪れる数多くの寺・神社があります。札幌には特別な精神的・神秘的なエネルギーにあふれた、北海道の最も大きい神社である北海道神宮が位置しています。

時間はあっという間に過ぎてしまいましたが、勤勉と高い文化、鋭い美的感覚と技術的進歩の組み合わせの好例であるこの驚くべき国に、もう一度戻ってきたいと思います。（ロシア語からミルラン・ベクトゥルスノフ訳、宇山監修）

日ソ合作のオペラ《光太夫》——ロシア初演へ

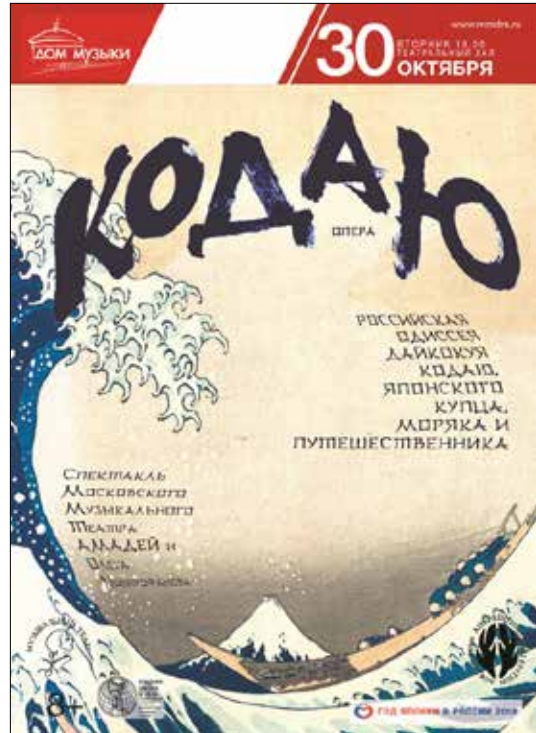
神竹喜重子（元センター非常勤研究員、現在日本学術振興会
特別研究員（PD）、東京藝術大学）

オペラ《光太夫（Кодаю）》は、メゾ・ソプラノ歌手の青木英子氏（1918～2010）が脚本を制作し、「シルクロード管弦楽作曲コンクール」の入賞者であり、アゼルバイジャン出身の作曲家ファルハング・フセイノフ氏（1949～2010）が音楽を手掛けた日ソ合作のオペラである。青木氏は、音楽を通じて（旧）ソ連と長きにわたる文化交流を築いていた。専門であった声楽、特にオペラに関心を持ち、ロシア独特の力強いバリトンを主役とした、日本とロシアの友好につながるオペラの制作を夢みていた。幸運にも、桂川甫周の『北槎聞略』に出会い、これを原作に脚本に着手したのが1970年代であった。オペラ《光太夫》の舞台の大部分はロシアであり、またその時代はロシア帝国の絶頂期である。当時君臨するエカテリーナ二世との謁見の場について、絢爛豪華なロシア宮廷の様子を表現しなければならないと考えた青木

氏は、ロシア音楽に精通し、また製作意図を十分に理解してくれる作曲家を探した。そこで白羽の矢が立ったのが、アゼルバイジャン音楽院、モスクワ音楽院でヴァイオリン、作曲を学び、カラ・カラエフ、アラム・ハチャトリヤンの薫陶を受けたフセイノフ氏だった。脚本着手からフセイノフ氏に出会い、彼による作曲の完成を見るまで実に20年超が過ぎた。構想を起点とすると30年を超える作品となった。脚本は、まずは日本語で制作され、これをロシア人に理解してもらうために、ロシア歌曲の第一人者である山下健二氏によって露訳がなされた。「山下氏の力なくしては、オペラは完成しえなかった」と青木氏は伝えている。このようにしてできあがったオペラは、当初青木氏の夢みていたロシア初演が想定されていたが、ソ連崩壊、そしてそれに続く政治的混乱の激動に遭い、ついに実現しなかった。

オペラ《光太夫》は、1782年12月13日に16名の船乗りと共に米等の荷物を満載して伊勢の白子の港より船出した、船頭大黒屋光太夫の怒涛の生涯をドラマ化したものである。物語は、光太夫たちが出航直後、暴風雨に遭い、帆・舵を失って北の海へと漂流し、アリューシャン列島のアムチトカ島（当時ロシア領）に漂着するところから始まる。何としても帰国したい光太夫一行は、帰国を嘆願するために、どうしても時のロシアの女帝に許しを請わなければならなかった。苦境の中、「事態打開のためには無謀と思われても行動を起こす以外に方策はない」と、光太夫はアムチトカ島民とロシア人商人とともに船を作り、生き残った9名の船乗りたちとともに、カムチャッカ（1787年7月8日）を経てオホーツクへと船旅を続ける。オホーツクからは冬のシベリア大陸を馬で横断し、嘆願書の提出できるイルクーツクを目指した。ロシア政府に対し、帰国の嘆願書を出すのがなしのついでであった。そこで出会ったのが、学者ラックスマンである。彼は光太夫の帰国嘆願に心を打たれ、やがて光太夫と信頼関係を築く。そして、ラックスマンには純情可憐な娘ソフィアがいた。いつしか光太夫とソフィアは心を通わせ、光太夫は帰国の望みとソフィアへの想いの中で揺れ動く。一方、ラックスマンの助力にもかかわらず、帰国の許可は与えられないまま、年月だけが過ぎていった。最終手段として、ラックスマンは光太夫を都サンクトペテルブルクに連れて行き、女帝エカテリーナ二世に直訴することを考える。光太夫は、それまでの経緯で多くの船員が倒れていった状況を考慮し、「もはやこのラックスマンの提案が最良策であろう」とサンクトペテルブルク行きを決断するのであった。そして、雪の降りしきる中を、ロシア正教会の鐘の音を時折耳にしながら、シベリア大陸を40日間走り続けるのである。ここまでがオペラ前半（二幕六場）のあらすじである。

後半では、40日間の苦闘の末いよいよエカテリーナ二世と謁見する日が描かれる。ラックスマンに鼓舞された光太夫は、女帝の前で帰国の嘆願のため、サンクトペテルブルクまでの苦難の旅路と帰国への強い希望を切々と訴える。女帝は優しく温かなまなざしで光太夫の話



オペラ《光太夫》モスクワ初演のフライヤー

を聞き、帰国の許可を与えるのだった。ここで、このオペラのハイライトの一つであり、未知の国日本に想いを寄せたエカテリーナ二世（メゾ・ソプラノ）のアリア「桜の花咲く遠い国」が歌われる。いよいよ9年9ヶ月の苦難の旅の末、夢にまで見た帰国の途につく日が訪れる。凍傷で片足を失った庄蔵、ロシア正教に改宗した新蔵をロシアに残し、光太夫はソフィアに別れを告げなければならなかった。ソフィアは光太夫の幸せを祈りつつも、深い悲しみの中で別れを決意する。ここで光太夫とソフィアの二重唱「心はあなたに残し」が歌われ、ソフィアはまた、アリア「悲しみのロマンス はこ柳の歌」で別れの辛さを伝える。祖国の地を再び踏んだ1792年2月29日、光太夫を待ち受けていたのは、江戸幕府からの厳しい詮議であった。船員の仲間を失ったこと、苦難の生活、危険を顧みず只管嘆願へと走った旅路、身を切る想いで別れたソフィア、そして帰国までの間親切にしてくれたロシアの人々を想う光太夫は、改めてそれまでの長い年月を振り返り、自分が持ち続けた望郷の念とは何だったのだろうかかと、一人寂しく「痛恨のアリア」を歌う。日本とロシアの懸け橋になろうとした光太夫の夢は、むなしく破れた。しかし、いずれは多くの日本人がロシアを、またロシア人が日本を訪れる時代が到来する。その暁には、光太夫の帰国を支援したロシア人がいたように、日ロの温かな友好関係が構築されるはずである。そのような希望を抱いて、光太夫はソフィアやラックスマンと過ごした日々を胸に生きてゆくことを心に誓う。オペラ《光太夫》には、このような日ロ友好への強いメッセージが含まれている。青木氏が、幾度となくフセイノフに強調したように、このオペラは「大衆に理解されない音楽は日ロ友好には役立たない」という信念のもと、日ロの聴衆、果ては世界の人々に広く聴かれることを願い、非常に馴染み易いメロディーにより作曲されている。また、随所にロシア人が好んで口ずさむ旋律が散りばめられており、特に第三幕第二場において遊女3人が歌う「ロマンス」が注目される。



日本初演当時の写真。左から2人目が青木英子氏、右隣が朗読の江守徹氏、その右隣がファルハンフセイノフ氏

青木氏の生前に同オペラのロシア初演は叶わなかったが、日本初演は1993年9月7日に、東京渋谷オーチャード・ホールにてテレビ朝日開局35周年事業の一つとして演奏会形式で行われた。朝比奈千足指揮、勝部太（バリトン、光太夫役）、ヴァレンチナ・ツィディボヴァ（ソプラノ、ソフィア役、当時キーロフ劇場（現マリンスキー劇場）専属、指揮者ゲルギエフによる推薦）、牛山剛（演出）など錚々たる面々が集まった。その後、大阪シンフォニーホール、光太夫出身地の三重県鈴鹿市民会館において上演された。現在、青木氏の遺志を継いだ青木義英氏がロシア初演のプロジェクトを進めており、日本音楽財団の古河美保氏が演奏家との交渉を、筆者がロシアの文化組織とのやりとりを担当してきた。今年2018年は、丁度日ロ外務省で取り決められた「ロシアにおける日本年」「日本におけるロシア年」に当たる。その文化交流の一環として、オペラ《光太夫》が10月30日にモスクワで、ロシア人による演奏で初演されることとなった。モスクワNPO法人アマデウス劇場主催で、国立ドム・ムズィキ劇場においてオレグ・ミトロファーノフ総監督により初演がなされる。さらに、ミトロファーノフ氏の提案により、これからの日ロ友好を見据え、是非ロシアの若い人たちにも約230年前の日ロ友好のきっかけを知ってもらおうと、第2030学校において小・中・高校生対象のオペラ公演の開催が予定されている。11～12月には、在ウラジオストク日本国総領事館主催のジャパンフェスティバル、シャリアピン協会によるオペラ公演の一環として、《光太夫》の

ウラジオストク初演の企画が進められている。日ロ友好の明るい未来を願って止まない。

ロシア初演に至るまでの経緯で、特に外務省ロシア課の方々、中村喜和先生、長縄光男先生、ピョートル・ポダルコ先生、エレオノーラ・サブリーナ先生をはじめとする来日ロシア人研究会の方々、アマデウス劇場の方々大変お世話になった。この場を借りて、心からの感謝を申し上げたい。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2018年6月9-10日 第58回比較経済体制学会全国大会 於北海道大学
http://www.jaces.info/site_news_files/2017-12NO59.pdf
- 6月23-24日 2017年度日本比較政治学会第21回大会 於東北大学 <http://www.jacpnet.org>
- 6月30日～7月1日 スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス“Globalization and Modern Eurasia: History, Trends, Challenges for Change” 於ウランバートル http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/text/Revised_Call_For_Papers_EAC%20IX-1.pdf
- 7月2-5日 2018 HOPS-SRC Border Studies サマースクール 於スラブ・ユーラシア研究センター
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/ubjr/eng/events/archives/201807/18070205.html>
- 7月5-6日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム
- 7月10-14日 第2回 ABS (Association for Borderland Studies) 世界大会 於ウィーン、ブダペスト <http://www.abs2018world.com/presentation/news/call-for-papers-borders-and-boundaries-in-asia/>
- 10月13-14日 ロシア史研究会2018年度大会 於首都大学東京
http://www.gakkai.ac/russian_history/ 大会 /
- 10月20-21日 ロシア・東欧学会2018年度研究大会 於神戸大学
<http://www.gakkai.ac/roto/>
- 10月25-28日 第19回 CESS (Central Eurasian Studies Society) 年次大会 於ピッツバーグ大学
<http://www.centraleurasia.org/annual-conf>
- 10月27-28日 日本ロシア文学会第68回全国大会 於名古屋外国語大学
http://yaar.jpn.org/2018年度_第68回全国大会/
- 11月2-4日 日本国際政治学会2018年度研究大会 於大宮ソニックシティ
<http://jair.or.jp>
- 11月10日 内陸アジア史学会2018年度大会 於日本大学
<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SLAS/>
- 12月6-9日 50th Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ボストン <http://www.aseees.org/convention>
- 2020年8月4-9日 ICCEES 第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>

[編集部]

大学院だより

2017年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、2名が修士課程を修了しました。また、服部倫卓さんが「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの通商・産業比較：地政学危機の中の経済利害」という論文で課程博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。

4月には、修士課程2名と博士課程1名の入学がありました。また研究生も3名増えました(うち1名は前年度の途中から)。今年度の大学院生は以下の皆さんです。[長縄]

2018 年度スラブ社会文化論専修大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員	博論指導
D3	アセリ・ ピタバロヴァ	中央アジア諸国・中国間関係における相互認識	岩下	宇山	田畑
D3	ヤン・ ファベネック	オホーツク海域及びその沿岸地域をめぐる現代の地 政学的課題	岩下	田畑	ウルフ
D3	小野 瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄	
D3	生熊 源一	戦後ロシア美術	安達	野町	ウルフ
D3	アリベイ・ マムマドフ	北方領土問題とナゴルノ・カラバフ紛争の比較	岩下	田畑	宇山
D2	寺岡 郁夫	ウクライナの構成地域とその形成過程	岩下	宇山	
D2	林 健太	ビョートル1世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	野町	
D2	ミルラン・ ベクトゥルスノフ	ソヴィエト・キルギスの形成：中央政権と現地人エ リート	宇山	長縄	
D1	中尻 恒光	ロシアにおけるマクロ経済政策に関する研究	田畑	仙石	
M2	上村 正之	19世紀ロシア文学上のコサック・イメージ	安達	宇山	
M2	谷原 光昭	非承認国家と「帝国」	宇山	仙石	
M1	唐牛 健成	ロシア極東における対日歴史観の変遷に関する研究	岩下	ウルフ	
M1	松元 晶	映画にみるウズベキスタン	宇山	安達	
研究生	ヴィクトリア・ アントネンコ	19世紀と20世紀におけるサハリンと日本との経済 関係	ウルフ		
研究生	王 雨寒	歴史と変遷：ウイグル人の中央アジアへの移住及び 文化の適応	宇山		
研究生	蔣 政倫	2015年以降ロシア極東経済特区における投資と国際 協力	田畑		
研究生	費 宇澄	ゴルバチョフと鄧小平の経済政策の比較	田畑		

大学院修了者の声

学際的な地域研究の拠点

服部倫卓（2017年度博士課程修了／一般社団法人ロシアNIS貿易会・
ロシアNIS経済研究所 副所長）

私は2014年4月北海道大学大学院文学研究科博士後期課程（歴史地域文化学専攻スラブ社会文化論専修）に入学し、博士論文「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの通商・産業比較：地政学危機の中の経済利害」を完成させ、2017年12月に博士（学術）の学位を授与されました。本来であれば3年きっかりで修了したかったのですが、本業（東京に所在する貿易促進団体付属の経済研究所に勤務）をこなしながらの博士論文執筆はそう簡単には進まず、9ヶ月の延長戦を要したことになります。

個人的なことですが、私は大学院に入るに当たって、「経済学者として自己確立する」という目標を定め、なるべく経済学に純化した研究・論文を目指そうと思っていました。当初予定していた研究テーマは、「ロシアの地域経済開発」というものでした。

しかし、ちょうど大学院の入試を受けていた2014年2月頃に、私が長らく研究に取り組んできたウクライナで、情勢が風雲急を告げていました。日本ではウクライナ研究者は希少なため、2014年秋にウクライナをテーマとした学会報告を3本もやることになりました。また、2015年夏に幕張で開催される大規模な国際学会で、これまた縁深いベラルーシについて報告してほしいという依頼も別途受けました。これだけ学会報告が続くことを考えると、大学院の研究テーマもそれに引き付けないと、とてもではないけれど乗り切れないだろうと考え、私は大学院の研究テーマを「ロシアの地域経済開発」から「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの通商・

産業比較」に切り替えたのでした。奇しくも、私の博士課程在籍期間は、ウクライナ政変後の地政学危機の時期とほぼ重なり合うことになり、その過程で発生した諸問題に向き合うことを迫られました。

なるべく経済学に特化するという当初の目論見も、崩れていきました。最終的に出来上がったのは、経済学の論文というよりも、経済を争点とする地域研究・国際関係研究の論文でした。むしろ、自分はプロパーの経済学者ではなく、あくまでも地域研究者なのだという現実を再認識したのが、この3年9ヵ月だったと言えるかもしれません。



2014年の政変直後のキエフ・マイダンのようす

実は私がロシア（当時はソ連）研究を志した最初のきっかけは、1983年9月の大韓航空機撃墜事件でした。民間航空機を撃墜する国というのは、一体どういう国なのだろうかという疑問を抱き、いわば「敵を知る」ためにソ連研究を志したのです。というわけで、元々の関心は安全保障だったのですが、その延長上で東西貿易、対ソ経済制裁、政治と経済のリンケージなどにも関心を持つようになり、現在の勤務先に職を得たことで本格的に経済研究にシフトしていったという経緯があります。こうした出自から、経済研究を生業としながら、経済学的方法論に不得手であるという引け目があり、博士課程では遅ればせながらその課題に注力する決意でした。

ところが、「さあ、大学院で経済学に特化だ」と思ったその矢先に、30年あまりの時を経て、再び民間機が撃墜される事件が起きました。2014年7月のマレーシア航空機撃墜事件です。私はその時、大学院の総合演習で初めての発表を行うために札幌に滞在していたのですが、上述のようにウクライナ研究者は希少なため、事件に関する分析やコメントを求め私の携帯に電話をかけてくるマスコミなどもあり、まるで自分のロシア研究のルーツに追いかけているような、奇妙な感覚を覚えました。

対象地域の情勢変化と、私自身の心境の変化とで、私の研究は当初意図したような経済学らしい経済研究にはなりません。しかしながら、自分の取り組んだ研究が無価値だとは、もちろん思っていません。本研究の対象地域であるロシア・ウクライナ・ベラルーシにおいては、本来は経済発展を図るための地域経済統合のイニシアティブ（ユーラシア統合とEUの近隣諸国政策）同士がぶつかり合って、内包されていた地政学的対立が前面に出ることとなり、そして激化した地政学対立が地域の経済を激しく揺さぶるというダイナミックで複雑な過程が生まれました。こうした現実を鑑みれば、経済問題を政治問題から切り離すのではなく、むしろ両者の相互作用に着目しながら分析したことには、意味があったと考えています。

もし仮に、他大学の経済学研究科で博士論文を執筆すれば、もっと方法論的に洗練された装いの論文が出来上がったかもしれません。しかし、それが研究者としての自分の持ち味を発揮するものになったか、ユーラシア地域のダイナミズムを捉えたものになりえたかという、疑問です。スラブ・ユーラシア研究センターと、それに基盤を置く大学院スラブ社会文化論専修には、対象地域を同じくしながらも、多様な研究分野の専門家が集い、日々切磋琢磨しています。そのような学際的環境に身を置いたからこそ、私は地域研究者としての自分の立ち位置を再確認でき、過度に方法論にとらわれることなく、自分らしい研究を貫徹できたのだと、今では思っています。（2018年4月6日）

「スラ研」について

秋月準也 (2017 年度博士課程単位取得退学)



筆者

この文章はおそらく「修了者の声」に載ると思われるのですが、だとすれば、私はまず自分が完全に明白な「修了者」ではないということから説明しなければなりません。これは「修了者の声」ではなく、正しくは「スラブ・ユーラシア研究センターで修士課程を修了し、そのまま博士課程に進学したものの博士論文を提出せず単位取得退学をし、まだ博士論文を提出する権利を有しつつ、いったんスラブ・ユーラシア研究センターのそばから離れる者の声」になります。以下には、研究センターの院生がどういった環境で研究をする

ことになるか、そして私自身がお世話になった方々へのお礼などが書かれますが、読者のみなさまはくれぐれも「修了者の声」としてではなく、あくまで「スラ(中略)から離れる者の声」であることを念頭に置きながら読んでいただければと思います。

まず、「スラブ社会文化論専修」はスラブ・ユーラシア研究センター内に院生研究室がある専修になりますが、ここに所属する大学院生の多くが北大からの内部進学ではなく、日本国内、あるいは世界各国の様々な地域の大学から進学してくる学生です。私自身もその一人で、学部生のころは郊外から都内の大学に片道一時間くらいかけて電車で通う典型的な大学生だったと思います。このような学生が北大の大学院に進学し、まず戸惑うことはすべてが「近くなる」ということでしょう。私の場合、そして他の多くの院生の場合もほぼ同様だったと思いますが、自宅、院生研究室、大学の附属図書館、札幌駅がすべて徒歩10分圏内に固まっている状態でした。そもそも北大の立地がすばらしいうえに、札幌駅の北口方面は学生にとって手頃な家賃で部屋が借りられることもあって、「研究室で研究したい派」の院生にとっても、「自宅で研究したい派」の院生にとっても、研究環境は申し分ないものだったと思います。

院生研究室についてももう少し詳しく書いていきます。「スラブ社会文化論専修」に入学すると、修士課程、博士課程を問わずすべての院生に個人用の机と本棚が割り当てられます。この割り当てられた範囲に関しては完全に個人用のスペースになりますし、24時間使用可能なので(*夜間は多少出入りが不自由になります)、院生研究室を勉学の拠点にする院生は多かったように思います。また、スラブ・ユーラシア研究センターは北大附属図書館と一階部分が通路で直接つながっているのも、例えば外が猛吹雪であったとしても、研究室で論文を書いている場合であれば、室内履きすら履き替えることなく、トロツキーの公式演説なりハルムスの全集なり、図書館にあるものであればなんでもすみやかに原典にあたることができます。

研究センター内には院生の他にも研究員、教員など、スラブ・ユーラシア地域に関する様々な分野の研究者が在籍しています。またシンポジウムや研究会、資料収集等で外部からも多くの研究者がセンターを訪問されます。ですから、個人的な意見としては、最初はなるべく院生研究室に入り浸って、センターで開かれる研究会に積極的に出席して、自分の前を通り過ぎていく人たちと少しずつ話しをしていくようにするとよいと思います。そうするだけでも、いろいろな分野でどのような研究者がどういったテーマで研究をしているか、今現在のおおよその状況が把握できることでしょう。

次に、スラブ・ユーラシア研究センターを離れるにあたり、これまでお世話になった方々について書かせていただきたいと思います。私は大学院にミハイル・ブルガーコフの文学を研究するために進学したわけですが、修士課程、博士課程の長い期間指導にあたってくださった望月哲男先生にまずお礼を申し上げたいと思います。望月先生には授業時間の他にも先生の研究室で翻訳や論文を長い時間にわたって指導していただきました。例えば私が拙い翻訳などをたずさえ、途方に暮れながら研究室を訪問した場合でも、あたたかく迎えてくれて一緒によりよい翻訳案を考えてくださるような先生でした。

また、センターでは特に修士課程の時期に、極東経済については荒井先生、中央アジア諸国の政治・文化については宇山先生、スラブ諸言語については野町先生と、様々な分野について書かれたロシア語の読み方を一応ですが学習することができました。結局、文学とはこういった様々な領域の集合体（《ごった煮》と言ったほうがいいかもしれません）なので、早い時期に多様なロシア語にふれる機会に恵まれたことが、文学作品の翻訳の際に役立ったのだと思います^①。ありがとうございました。他にも、センターの助教の方々、研究員として滞在された方々、研究センターの事務の方々、そして院生研究室でともに過ごした院生のみなさん、この文章を書いている間にも数え切れないほどの人たちの顔が浮かんできます。研究に関すること、研究以外のこと、本当にいろいろな面でたくさんの方々にお世話になりました。私がこの研究センターに来て最も深く実感したのは、「世界はとても広いけれども、意外とせまい」ということです。お別れの挨拶っぽいことを書いてはいますが、どこかでばったり顔を合わせることもあるでしょう。そのときはまたよろしく願います。（2018年4月24日）

① 編集部注：秋月さんはブルガーコフの『ゾーヤ・ペーリツのアパート』の翻訳で2016年に小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞しました。センターニュース第148号を参照。

図書室だより

◆ 最近の受入資料から ◆

近年、資料購入予算が大幅に減少しており、なかなか高額資料の購入には踏み切れないのが現状ですが、ときにはちょっと珍しいものが入ることもあります。そうして入手した資料から、いくつか紹介させていただきます。

①『大日本正教会公会議事録』明治18年8月〔東京〕正教本会、1885年、73ページ、折り込み1枚。（資料番号：1380725686）

正教会の公会は、全国の教会関係者が一堂に会して、教会の活動全般について討議する、いわば教会の年次総会のようなものと思われ、その議事録には公会の議事内容のほか、出席者名簿、教会とその担当司祭の表、伝教規則および統計表が収録されています。

正教会の状況について調べる上での基本資料と思われ、各地の正教会には伝わっているかもしれませんが、国会図書館が所蔵するのは1902年と1903年の2年分のみで、大学図書館での所蔵例もごく限られています。

センターが最近購入した本号は、当時北海道と東北北部を担当していた小松韜藏（ティト）司祭による色丹島教会の状況報告を含んでいます。

また、本書の表紙には「溪井保羅君」と墨書があり、宮城県北部から秋田県南部にまたが

る若柳、十文字、佐沼の信徒を代表して公会に参加した浜井パヴェルが所持していたものと推察されます。

② “Военная мысль” 刊. 1. Издание Революционного военного совета Туркестанского фронта. Действующая армия. Ташкент, Сентябрь 1920. 445, II с. (資料番号: 1380708492)

トウルケスタン戦線革命軍事評議会が刊行したこの雑誌は、1920年9月に刊行された本号が初号と思われ、ロシア国民図書館（ペテルブルク）の目録によると、翌年さらに1号から3号まで刊行されています。

内容は、科学の部、政治の部、経済の部、概観、技術の部、芸術・科学技術ニュース・航空、書評等にわたり、巻末に、出版の趣旨を説明する編集部後記が載っています。

発行部数はわかりませんが、これは単なる軍事雑誌や広報誌ではなく、赤軍に勤務する知識層の知的要求に応えようとした啓蒙雑誌の性格が感じられます。

付録として、インドの「戦略地図」が付いています。

③ 『薩哈唎州地誌』1912年薩哈唎州知事官房編纂、同州知事デ・グリゴリエフ監修、[1920年?], 108丁. ガリ版 (資料番号: 1380689991)

本書は、元の資料の年代が1912年とありますが、実際には1920年初めまでのことが記述されています。同年、尼港事件の発生をうけて日本軍が北サハリンに進出した際、現地での活動もしくは統治の参考とするため、サハリン州当局が作成した資料を翻訳し、現地で得た新しい情報を増補したもののようです。そのための資料を提供したのは、現地にいた日露の住民か、あるいはこの時日本軍に同行して島に入ったグリゴリエフ元知事その人なのかも知れません。

ガリ版の刷りにムラが多く読みにくいのですが、日露戦争後の北サハリンが、1917年の革命を経て1920年に日本軍に占領される直前までの状況を伝える資料として、利用価値があるように思われます。

④ 『尼港撤退顛末』(薩軍情第1号) [アレクサンドロフスク?]: 薩哈唎州派遣軍司令部, 1920年. [27丁] (資料番号: 138068531)

このガリ版刷りの小冊子は、薩哈唎州派遣軍が、現地で作業をおこなうための文書として作成し、軍内担当部署等に配布したものと見られます。表紙には「大正九年十月九日」と日付があり、同年秋のニコラエフスクからの軍と邦人の一時撤収に向け、現地の状況や派遣軍の施策、撤退の具体的な手順について述べ、巻末には「黒竜江沿岸不良村一覧図」が折り込みで付属しています。

この冊子は、古書店から入手したのですが、「井上恒正収集文書」整理番号--007と書いた、衆議院憲政記念館の事務用封筒に入っており、同氏が一時所蔵していたものとみられます。

⑤ 『尼港事変乃顛末(附薩哈唎乃沿革)』1924年. [32丁]. (資料番号: 1380686474) は、編者、出版者とも明示されていませんが、同じく、薩哈唎州派遣軍がその執務用に作成し、関係部署に配布した資料と推察されます。ガリ版で略地図をいくつか含み、裏表紙には「長江蔵書」という墨書が見られます。

軍内の尼港事件に対する認識を示す史料として貴重なものと考えます。

⑥ 『北海』創刊号. 札幌: 北海道水産協会, 1929年. 56頁. (資料番号: 1380725697)

本誌は、北海道水産協会の機関誌的なものとして創刊されたもので、巻頭には北海道庁小石季一水産課長の「発刊の辞」、北海道帝大水産専門部佐々茂雄主事の「創刊を祝す」などの記事が並んでいます。

「本欄」には、「千島列島の現況と其の開発」、「水産物利用振興について」など漁業政策的

な文が多く見られ、後半の「本会記事」は、事業計画や会則、役員名簿など、水産協会の運営に関する情報を掲載しています。

どうしたことか本誌を所蔵する図書館は非常に少ないようで、他には北海道立図書館が、創刊号から第3号までを所蔵する以外、確認できていません。

センター図書室は、これと併せて雑誌『北日本』創刊号・東京：北日本社、1924年・を入手しました。こちらは、北海道と樺太の時評を扱うもので、本学附属図書館本館の佐藤昌介文庫に1巻1号と2号が所蔵されていますが、他の図書館での所蔵は、国会図書館や道立図書館を含め確認できていません。

⑦ Сергеев, М.А. Советские острова Тихого океана. Ленинград : Государственное социально-экономическое изд-во, Ленинградское отд-ние, 1938. 280 с. (資料番号: 1380707308)

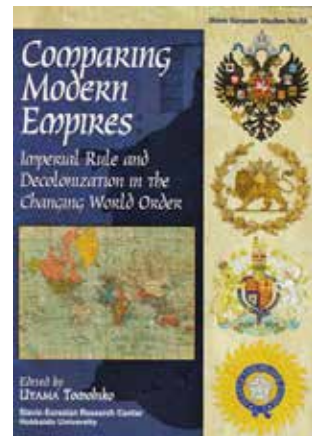
太平洋上のソ連の島としてこの本が取り上げるのは、コマンドル諸島、カラガ諸島、シャンタル諸島の3つです。前2者はカムチャッカ半島に近く、シャンタル諸島はオホーツク海の西端近くにあります。このようなテーマの本はこれ以前もこれ以後にも出ていないように思われ、この本の出版は、1930年代後半の対日関係が微妙な時期において、ソ連の太平洋上の領土に対する関心を示したものと考えられます。

なお、国内でこの資料の他の所蔵館は確認できませんでした。[兔内]

編集室だより

◆ Slavic Eurasian Studies No. 33 ◆ *Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order* Uyama Tomohiko, ed. の刊行

標記の図書がセンターから刊行されました。この論集は、世界のさまざまな帝国のあり方とその崩壊後に残る影響を、近現代を中心に、その時々々の国際関係・世界秩序を視野に入れながら論じたものです。ロシア帝国、イラン、英領インド、「アメリカ帝国」、中国などを対象として、帝国の強さと弱さ、帝国統治の手法と協力者・媒介者・反乱者の役割、帝国と近代化の関係、中央・周縁関係と自治、脱植民地化と冷戦の論理の交錯といった論点を取り上げており、多様なテーマを扱いながら、全体として近現代における帝国の変化の軌跡をたどる構成になっています。2012年1月の国際シンポジウムで発表されたペーパーがもとになっており、刊行までに長い時間がかかってしまったことをお詫びします。以下は目次です。[宇山]



UYAMA Tomohiko Introduction

Jane BURBANK Chapter 1: Empire and Transformation: The Politics of Difference

Rudi MATTHEE Chapter 2: *Zar-o Zur*: Gold and Force: Safavid Iran as a Tributary Empire

Maria MISRA Chapter 3: Indian Aristocrats, British Imperialists and “Conservative Modernization” after the Great Rebellion

UYAMA Tomohiko Chapter 4: Invitation, Adaptation, and Resistance to Empires: Cases of Central Asia

- IKEDA Yoshiro Chapter 5: Toward an Empire of Republics: Transformation of Russia in the Age of Total War, Revolution, and Nationalism
- KAN Hideki Chapter 6: The Making of “an American Empire” and US Responses to Decolonization in the Early Cold War Years
- Qiang ZHAI Chapter 7: Road to Bandung: China’s Evolving Approach to De-Colonization
- TSAI Tung-Chieh Chapter 8: Is China Becoming an Empire? Strategic Tradition and the Possible Options for Contemporary China

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no33_ses/index.html

◆ 『境界研究』 第 8 号の刊行 ◆

境界研究ユニット (UBRJ) が編集をおこなっている和文査読誌『境界研究』8号が刊行されました。論文3本、資料紹介1本、書評3本の他に、今号から新たに加わった種別「ディスカッション」から1本が収められています。ディスカッションは、「萌芽的な内容であっても、既存の境界研究・理論に対する批判的・挑戦的な内容を含む論稿」を対象としています。崔紗華氏による、東京都立朝鮮人学校の廃止をめぐる事例について新たな視点をもたらす意欲的な論考に始まり、松本和久氏による初期満ソ国境の紛争についての詳細な調査結果も報告されています。[斎藤]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/JapanBorderReview/no8/>

◆ *Eurasia Border Review* 8(1) の刊行 ◆

境界研究ユニット (UBRJ) が刊行する英文学術誌である *Eurasia Border Review* の Vol. 8, No. 1 が刊行されました。内容は以下の通りです。[ブル]

<Articles>

- Fuminori Kawakubo The Transformation of Border Security Practices from Fixed Borders to New Modalities and Privatization: From the Perspective of Critical Border Studies
- Martin Klatt The Danish-German Border Region: Caught between Systemic Differences and Re-bordering
- Dagmara Jajeśniak-Quast B/ORDER IN MOTION: The German-Polish Border from the System Transformation until the Present-Day European Integration
- Goro Christoph Kimura Signs of De-territorialization? Linguistic Landscape at the German-Polish Border

<Special Section: Border and Gender Studies>

- Kathleen Staudt and Irasema Coronado Gendering Border Studies: Biopolitics in the Elusive U.S. Wars on Drugs and Immigrants
- Kimberly Collins Redefining Security at the U.S.-Mexican Border: A Feminist-Pragmatist Approach
- José Miguel Nieto Olivar and Flávia Melo Cunha Gender, Narratives and Perspectives: Notes toward an Anthropological Understanding of Government on the Border between Brazil, Peru and Colombia
- Naomi Chi ‘Growing Pains?’: Feminization of Migration and Marriage Migrants in South Korea
- Kimberly Collins and Naomi Chi Concluding Thoughts on the Special Issue

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第65号は9本の投稿のうち、以下の重厚な力作を掲載することになりました。

(論文)

- 鳥飼将雅 全てのウクライナ人はオレンジだったのか? : 2004年ウクライナ大統領選における政治マシーンと東西亀裂
- 中田瑞穂 第二次大戦後チェコスロヴァキアにおける人民の民主主義と政党間競争 : 国民社会党を中心に
- 鈴木健太 1988年セルビアにおける大衆運動とナショナリズム : ヴォイヴォディナの諸集会についての一考察

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第66号の原稿締め切りは、2018年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください(事前申し込みは不要です)。

なお、欧米の社会科学系の雑誌でデータや図表を補遺として掲載することが近年奨励されていることに鑑みて、執筆要領に次の条項を追加することにしました。

執筆者は、論考の性格に応じて、データについての解説や図表を補遺として論考と共に『スラヴ研究』のウェブサイトに掲載することができる。ただし、補遺を掲載する必要性については執筆者と協議の上、編集委員会で判断する。 [長縄]

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

Acta Slavica Iaponica 第39号は、5月中旬に刊行されました。内容は以下の通りです。次号の締め切りは2018年7月13日(金)です。ふるってご投稿ください。[野町]

ARTICLES

- David R. Marples Decommunization, Memory Laws, and “Builders of Ukraine in the 20th Century”
- Pavol Babos Globalization and Support for Democracy in Post-Communist Europe
- Tomasz Wicherkiewicz Minority Languages of Poland: Dynamics of Contacts and Changes after 1989
- Jasmina Gavrankapetanović-Redžić Culture, Memory and Collective Identities in the (Re)Making: The National Museum of Bosnia and Herzegovina

BOOK REVIEWS

- Aburamoto Mari Mischa Gabowitsch, *Protest in Putin's Russia* (Cambridge, UK and Malden, MA: Polity Press, 2017), 332 pp.
- Bożena Shallcross Tokimasa Sekiguchi, *Eseje nie całkiem polskie* (Kraków: Universitas, 2016), 288 pp.
- Mikhail Suslov Maxim Shadurski, *Utopia as a World Model: The Boundaries and Borderlands of a Literary Phenomenon* (Siedlce: Wydawnictwo IKR[i]BL, 2016), 150 pp.
- Abe Kenichi Marijeta Bozovic and Matthew D. Miller, eds., *Watersheds: Poetics and Politics of the Danube River* (Boston: Academic Studies Press, 2016), 380 pp.
- Светлана Толстая Bohumil Vykypěl and Vít Boček, eds., *Perspectives of Slavonic Etymology* (Praha: Lidové noviny, 2016), 124 pp.
- Борис Норман *Предраг Пинер*. Лингвистичка славистика. Студије и чланци. Београд: Славистичко друштво Србије, 2014. 472 С.
- Hannu Tommola Я.В. Мызникова. Русско-прибалтийско-финские языковые контакты и их отражение в области диалектного синтаксиса. СПб.: Нестор-История, 2014. 195 С.
- Aleksandra Salamurović Daniel Bunčić, Sandra L. Lippert, and Achim Rabus, eds., *Biscriptality: A Sociolinguistic Typology* (Heidelberg: Universitätsverlag Winter GmbH, 2016), 425 pp.
- Глеб Пилипенко *Дојчил Војводић*. Проблематика развоја футура и његове граматикализације у словенским језицима. Русе: Лени-Ан, 2012. 198 С.

- Ljubodrag Ristić Oto Luthar, ed., *The Great War and Memory in Central and South-Eastern Europe* [Balkan Studies Library, Volume 17] (Leiden and Boston: Brill, 2016), 191 pp.
- Tomasz Kamusella Gábor Almási and Lav Šubarić, eds., *Latin at the Crossroads of Identity: The Evolution of Linguistic Nationalism in the Kingdom of Hungary* [Ser: Central and Eastern Europe, Volume 5] (Leiden: Brill, 2015), xiv+312 pp.
- Inoue Takehiko Н.В. Цыремпилов. Буддизм и империя. Бурятская община в России (XVIII – нач. XX в.). Улан-Удэ: Институт монголоведения, буддологии и тибетологии СО РАН, 2013. xiii+338 С.

会議 (2018年2月)

◆ センター協議委員会 ◆

2017年度第5回 2月19日(月)

- 議題
1. 客員教授・准教授の選考について
 2. 2018年度非常勤講師の採用について
 3. 研究生の受入(継続)について
 4. 教授人事に関する選考委員会報告について

2017年度第6回 2月22日(木)

- 議題
1. 教員の人事について [事務係]

誰が何をどこで

2017年度(4~3月)の専任研究員・助教・客員教授・非常勤研究員・博士研究員の研究成果、研究余滴のアンケート調査(提出は任意)を以下のようにまとめました。〔五十音順〕[大須賀]

油本真理 ㊦ 1 学術論文 ▼プーチン再登板後のロシアにおける「反体制派の時代」: 政治体制の正統性をめぐる攻防『ロシア・東欧研究』45:47-61 (2017) ▼ポスト冷戦時代のリベラル・デモクラシー: ソ連解体後のロシアにおける民主化とその帰結(松戸清裕編『ロシア革命とソ連の世紀 第3巻 冷戦と平和共存』197-220, 岩波書店, 2017) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼No Longer Putin's Party? Handling the Unpopularity of United Russia during Putin's Third Term, BASEES Annual Conference 2017, Cambridge, UK (2017.4.1)

岩下明裕 ㊦ 1 学術論文 ▼北方領土問題への墓標: 2016年12月安倍・プーチン会談という歴史的転換『地理の研究』196:10-17 (2017) ㊦ 2 その他業績(論文形式) (5) その他 ▼はしがき(屋良朝博他『日常化された境界: 戦後の沖縄の記憶を旅する』2-4, 北海道大学出版会, 2017) ㊦ 3 著書 ▼(ジョナサン・ブルと共編著) *Positioning Asia and Kyushu in Shifting Global Politics* [スラブ・ユーラシア研究報告集9], 54 (SRC, 2017) ▼(編著)『ボーダーツーリズム: 観光で地域をつくる』270 (北海道大学出版会, 2017; 1-28, 133-135, 185-241, 247-250を執筆) ▼*Japan's Border Issues: Pitfalls and Prospects* (paperback), 144 (Routledge, 2018) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼The Northern Territories and the Abe-Putin Meeting: Implications for the Asia-Pacific Region, Korean Association for International Studies, Chonbuk National University, 韓国(2017.6.30) ▼A Voice of the China-Russia Borders, 中国辺境研究所シンポジウム, Inner Mongolia University of Finance and Economics, 中国(2017.10.13) ▼An Epitaph to the Northern Territories: A New Era of the Japan-Russia Relations?, 特別セミナー, ポーランド東方研究所(2017.10.6) ▼The US-Russia-China-Japan Quadrangle: Multiple Perspectives on Northeast Asia, キングス・カレッジセミナー, ロンドン(2017.10.9) ▼Russian Realities in Northeast Asia: China, Japan and North Korea, 日独センターシンポジウム, ベルリン(2017.11.3) ▼Japan Foreign Relations toward South/Central Asia

Contextualize India, China, Russia and the US, キューバ国際政治研究センターセミナー, ハバナ (2017.12.8)

▼ Russia in the US-Japan Alliance? Beyond Chinese and North Korean Challenges, 日米研究インスティテュート, ワシントン DC (2018.2.26)

宇山智彦 ① 1 学術論文 ▼ 権威主義の進化、民主主義の危機：世界秩序を揺るがす政治的価値観の変容 (村上勇介、帯谷知可編『秩序の砂塵化を超えて：環太平洋パラダイムの可能性』35-56, 京都大学学術出版会, 2017) ▼ 「総説 ユーラシア多民族帝国としてのロシア・ソ連」, 「ロシア・ムスリムの革命と『反革命』：『想像の帝国』との協力と闘い」, 「ソ連ノスタルジー：ウクライナ紛争の一背景」(宇山智彦編『ロシア革命とソ連の世紀 第5巻 越境する革命と民族』1-34, 37-64, 315-316, 岩波書店, 2017) ▼ Эволюция идеи автономии Алаш на волне общероссийских политических событий до и во время революции (Сборник статей международной научной конференции «От Алаш к независимости и национальной консолидации Казахстана», 315-325, Западно-Казахстанский центр истории и археологии, 2017) ▼ “Introduction,” “Invitation, Adaptation, and Resistance to Empires: Cases of Central Asia,” (Uyama Tomohiko, ed., *Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order* [Slavic Eurasian Studies No. 33], 1-10, 99-118, SRC, 2018) ① 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ Sino-Russian Coordination in Central Asia and Implications for U.S. and Japanese Policies, *Asia Policy*, 13(1):26-31 (2018) (4) 翻訳 ▼ (編訳・序文・注釈) カランダロフ・トヒル「パミールのイスマール派：認知されざる諸民族、宗教共同体としての将来」『日本中央アジア学会報』13:25-37 (2017) (5) その他 ▼ Японско-центральноазиатские отношения в глобальном контексте («Орталық Азиядағы жапонтану: бүгінгі мен болашақтағы даму бағыттары» апты халықаралық ғылыми-тәжірибелік конференция материалдары, 6-9, Алматы: әл-Фараби ат. ҚазҰУ, 2017) ▼ (和田春樹、塩川伸明、池田嘉郎、長縄宣博、松里公孝と) ロシア革命百周年記念討論会『ロシア史研究』99:26-61 (2017) ▼ (黒木英充、小泉直美、小森田秋夫と) パネルディスカッション：漂流する世界とブーチンのロシア『ロシア・東欧研究』45:62-88 (2017) ▼ (インタビュー) Профессор университета Хоккайдо про ислам и о том, что интересует Японию в ЦА, АКИpress (2017.9.12) ▼ (インタビュー) Т. Уяма: Октябрьский переворот подтолкнул к созданию автономии, Портал «История Казахстана» (2017.11.7) ① 3 著書 ▼ (編著)『ロシア革命とソ連の世紀 第5巻 越境する革命と民族』338 (岩波書店, 2017) ▼ (編著) *Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order* [Slavic Eurasian Studies No. 33], 235 (SRC, 2018) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Why in Central Asia, Why in 1916? The Revolt as an Interface of the Russian Imperial Crisis and the World War, BASEES Annual Conference 2017, Cambridge, UK (2017.4.1) ▼ Prospects for Sino-Russian Coordination in Central Asia and Implication for U.S. and Japanese Policies, Russia-China Cooperation & Challenges to the U.S.-Backed Global Order: Policy Implications and Recommendations, The National Bureau of Asian Research, Washington, DC (2017.7.19) ▼ Эволюция идеи автономии Алаш на волне общероссийских политических событий до и во время революции, От Алаш к независимости и национальной консолидации Казахстана, Западно-Казахстанский центр истории и археологии (2017.10.20) ▼ Политическая стратегия Алаш-Орды во время гражданской войны: сравнение с национально-культурной автономией тюрко-татар, Теоретико-методические проблемы по изучению истории автономии Алаш, Евразийский национальный университет, Астана (2017.10.24)

▼ The Alash Orda's Strategy for Political Negotiations in Comparison with the National-Cultural Autonomy of the Turco-Tatars, Enlightenment Movements in the Turkic World: 100th Anniversary of Alash, Turkish Historical Society (2017.11.24) ▼ Research Trends in Japan on the Russian Revolution and the Soviet Union from the Perspective of Imperial History, Winter International Symposium of the SRC “The Russian Revolution in the Long Twentieth Century,” SRC (2017.12.8) ▼ “Authoritarian and Imperialist Tendencies in the Post-Soviet Space and Their Implications for World Politics,” “Political Regimes in Central Asia between Authoritarianism and Democracy: With a Focus on Kyrgyzstan,” Political and Social Developments in Russia and Eurasia, National Chengchi University, Taipei (2017.12.19)

▼ Implications of the Return of the Eurasia-Centered World Order, ユーラシア 2025：ポスト・パワーシフトの地政学, グローバル・フォーラム, 東京 (2018.2.28) ▼ История мусульманских восстаний в Китае как ориентир для изучения восстания 1916 года в Центральной Азии, Объединение академических сообществ Центральной Азии для получения новых знаний о восстании 1916 года, КИЦ Айгине, Бишкек (2018.3.31)

ウルフ・ディビッド ① 1 学術論文 ▼ Pages from the Past: The Rockefeller Foundation, Global Area Studies and the SRC (David Wolff, ed., *SRC at 60: New Historical Materials and Perspectives* [Slavic

Eurasian Studies No. 32], 3-24, SRC, 2017) ㊦3 著書 ▼ (編著) *SRC at 60: New Historical Materials and Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 32], 113 (SRC, 2017) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ Great Octobers: Russia's Revolutions, the Russo-Chinese Borderlands and the Rise of China, Summer International Symposium of the SRC "Northeast Asia's Faultline: One Hundred Years of Sino/Russian/Soviet Competitive Cooperation," SRC (2017.7.13) ▼ Russo-Chinese Affinities, Workshop on Russia's Turn to Asia, Centre for Eastern Studies, Warsaw (2017.10.6) ▼ Россия в великой войне и революции, Взгляд на мегапроект с Востока, IRI RAN, Moscow (2017.10.9) ▼ From Friends to Foes: A Path to the Cold War in East Asia, The 49th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago (2017.11.10) ▼ SRC at 60 and the Role of the Rockefeller Foundation, Lunch talk at Rockefeller Archives Center (2017.11.14)

大野成樹 ㊦1 学術論文 ▼ Financial Development and Economic Growth Nexus in Russia, *Russian Journal of Economics*, 3(3):321-332 (2017) ▼ Spillovers of US Conventional and Unconventional Monetary Policies to Russian Financial Markets, *International Journal of Economics and Finance*, 10(2):14-19 (2018)

加藤美保子 ㊦1 学術論文 ▼ 東方シフトと「中国優先主義」の諸問題『海外事情』(特集「ロシア外交の新展開」) 5月号 :56-68 (2017) ㊦4 その他業績 (著書形式) ▼ (シンポジウム報告集) (J. Bull と共編著) *There Goes the Neighborhood: Increasing Tensions in Cooperative Northeast Asia* [Northeast Asia Today Vol. 3], 51 (SRC, 2017.9) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ ロシア外交における東方シフト: 中国優先主義の問題を考える, 北海道スラブ研究会, SRC (2017.5.31) ▼ "Sinocentrism" in Russia's Reorientation to the East: Constraint or Stabilizer?, Summer International Symposium of the SRC "Northeast Asia's Faultline: One Hundred Years of Sino/Russian/Soviet Competitive Cooperation," SRC (2017.7.13) ▼ 北東アジアの国際秩序と中ロ関係, NPO 法人ロシア極東研 2018 年 1 月研究会, 北海道大学学術交流会館 (2018.1.12) ▼ Sugihara and Inturist, Conference on Russia's North Pacific, German Historical Institute, Moscow (2018.3.29)

神竹喜重子 ㊦1 学術論文 ▼ グリゴリー・フリードの《アンネの日記》(1969): 「交流」としての芸術『プロジェクト研究』[早稲田大学総合研究機構] 13:39-52 (2018) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ Grigory Frid's "The Diary of Anne Frank" between Germany and Russia, The 8th East-Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies "Conflict and Harmony in Eurasia in the 21st Century," Chung-ang University, Korea (2017.6) ▼ Grigory Frid's "The Diary of Anne Frank": The Rise of Mono Opera as a Genre and Frid's Moscow Youth Musical Club, ソビエト史研究会 2017 年次研究大会, 専修大学サテライトキャンパス (2017.7) ▼ 19 世紀末から 20 世紀初期におけるロシア古儀式派商人の芸術メセナについて, 日本ロシア文学会 2017 年度北海道支部研究会, 北海道大学 (2017.7) ▼ Grigory Frid's "The Diary of Anne Frank": Recollection and Philosophical Thoughts on the Meaning of Life, The 3rd International Workshop in Slavic and Eurasian Studies, University of Szeged, Hungary (2017.9) ▼ 19 世紀末から 20 世紀初期のロシアにおける芸術メセナ: 古儀式派の資本家と私立歌劇場, 第 67 回日本ロシア文学会全国大会, 上智大学 (2017.10) ▼ 19 世紀末から 20 世紀初期のロシアにおける芸術メセナ: 古儀式派の資本家と私立歌劇場, 第 68 回日本音楽学会全国大会, 京都教育大学 (2017.10) ▼ 古儀式派商人による音楽メセナとロシア音楽の「自己覚醒」: 私立マーモントフ歌劇場を中心に, 早稲田大学オペラ/音楽劇研究所 2017 年度 11 月研究例会 (第 166 回オペラ研究会), 早稲田大学 (2017.11) ▼ The Patronage of Arts in Russia from the End of the 19th Century to the Early 20th Century: Old Believers and Private Opera Theaters, BASEES Annual Conference 2017, Cambridge, UK (2017.4)

菊田悠 ㊦2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 中央アジアの「青い陶器」の誕生と発展: パレオアジア文化史学の視点から (野林厚志編『パレオアジア文化史学: アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 B01 班 2017 年度研究報告 No.2』34-37, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究, 2017) ㊦4 その他業績 (著書形式) ▼ (事典項目) ウズベキスタン (中牧弘允編『世界の歴史文化事典』152-155, 丸善出版, 2017) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ 中央アジアにおける社会関係とモノの変化: 青い陶器の伝播と消滅, 国立民族学博物館「パレオアジア文化史学第 3 回研究大会」(2017.5.14)

北見諭 ㊦1 学術論文 ▼ セルゲイ・ブルガーコフの経済哲学におけるマルクス主義とソフィア論『スラブ研究』64:75-107 (2017) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ 例外状態における世界創造とメシアニズム: 第一次世界大戦期におけるベルジャーエフの思想、「超越性」と「生」との接続: 近現代ロシア思想史の批判的再構築に向けて」研究会, 早稲田大学 (2017.9.14)

木村護郎クリストフ ㊦1 学術論文 ▼ (高橋絹子と) だれがいつどこで何のために通訳を使うのか: 日英ビジネス通訳の事例から『通訳翻訳研究への招待』17:1-19 (2017) ▼ 異言語間コミュニケー

ションにおける学校の可能性：ドイツ・ポーランド国境の事例から（林徹、安達真弓、新井保裕共編『学校を通して見る移民コミュニティ：多言語使用と言語意識に関する報告』[『東京大学言語学論集』別冊2] 93-100, 東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室, 2018) ▼ *Interlinguale Strategien als Element der Interkulturalität: Dargestellt am Beispiel des Sprachmanagements einer deutsch-polnischen Theaterinszenierung, Aussiger Beiträge. Germanistische Schriftenreihe aus Forschung und Lehre*, 11:141-154 (2017) ▼ *Signs of De-territorialization?: Linguistic Landscape at the German-Polish Border, Eurasia Border Review*, 8(1):45-58 (2018) ▼ 「言語における『自然』と『人為』:説明用語から分析対象への転換」,「原発と英語：日本における普及過程、問題構造および対策の共通性」(かどや・ひでのり、ましこ・ひでのり編著『行動する社会言語学』47-66, 153-180, 三元社, 2017) ▼ *Lingvoideologia aliro: Ĉu Esperanto vere havas “internan ideon”?* [言語イデオロギーからのアプローチ：エスペラントに「内在する理念」はあるのか] (Oscar Christer Kiselmann, Renato Corsetti, Probal Dasgupta, eds., *Aliroj al Esperanto*, 117-127, Dobřichovce: KAVA-PECH, 2018) ▼ 言語が異なる人と何語でどのように話すのか：お互いの言語を使う意義と方法について (泉水浩隆編『ことばを教える・ことばを学ぶ：複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) と言語教育』87-108, 行路社, 2018) ¶2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 序章および14章「つながり方を探るドイツ・ポーランド国境地域：異言語間コミュニケーションの諸方略」(平高史也、木村護郎クリストフ編著『多言語主義社会に向けて』194-206, くろしお出版, 2017) ▼ *Esperanto als Brückensprache zwischen Deutschen und Polen* [ドイツとポーランドの間の架け橋の言語としてのエスペラント] (Fritz Wollenberg, ed., *Esperanto: Sprache und Kultur in Berlin und Brandenburg. Jubiläumsbuch 1903-2014*, 316-324. New York: Mondial, 2017) ▼ ソルブ語研究への誘い, 新ソルブ通信, 2017 <<http://serbja.web.fc2.com/>> (2) 研究ノート等 ▼ ドイツ・ポーランド国境地域における言語混合と混合言語『上智大学国際言語情報研究所年次報告 2016年度』41-43 (2017) ▼ *The Role of Language Ideology in Norm Negotiation, Working Papers in Language Management 2* (2017) <http://language-management.ff.cuni.cz/system/files/documents/wplm-02_kimura.pdf> ▼ (米山かおると) 日独共学と「やさしい日本語/leichte Sprache」の導入『ドイツ語教育』22:75-81 (2018) (3) 書評 ▼ 書評 徴兵制のない日本で兵役拒否を考える意味：キム・ドゥシク (山田寛人訳)『「平和主義」とは何か：韓国の良心的兵役拒否から考える』(かんよう出版, 2017年)を読んで『非暴力平和隊 (NPJ) ニュースレター』64:20-23 (2017) ▼ 近刊短評 言語権論の展開『ことばと社会』19:256 (2017) ▼ 英語に厳しすぎか甘すぎか：『節英のすすめ』(萬書房, 2016年)の二つの書評への応答『社会言語学』17:157-160 (2017) (4) 翻訳 ▼ イジー・ネクヴァピル「チェコの多国籍企業の言語使用と言語管理：言語の機能の観点から」(平高史也、木村護郎クリストフ編著『多言語主義社会に向けて』207-219, くろしお出版, 2017) (5) その他 ▼ 私の刊行した本『節英のすすめ』『ゲルマニア』20:64-65 (2017) ▼ 福島原発事故から6年：ドイツのエネルギー政策から何を学ぶか, YOMIURI ONLINE (2017.5.1) <http://www.yomiuri.co.jp/adv/sophia/opinion/opinion_02.html> ▼ 今なぜ節英か：脱英語依存への道『エスペラント』(2017.11) ▼ 自国中心主義を超えるために：「満洲国」の歴史から何をどのように学ぶのか『星火方正』[方正友好交流の会会報] 25:1-3 (2017) ¶3 著書 ▼ (平高史也と共編著)『多言語主義社会に向けて』227 (くろしお出版, 2017) ¶5 学会報告・学術講演 ▼ *Why and How Ideology Matters for Language Management Theory, The 5th International Language Management Symposium, Universität Regensburg, Germany* (2017.9.13) ▼ 節英から多言語へ：なぜ、どのように節英するのか, 日本外国語教育推進機構 (JACTFL) 平成29年度講演会, 慶應義塾大学 (2017.11.19)

越野剛 ¶1 学術論文 ▼ (田村容子と共著) 連環画の中のソ連：女性兵士の物語『朝焼けは静かなれど』の受容『連環画研究』7:48-66 (2018) ¶2 その他業績 (論文形式) (2) 研究ノート等 ▼ スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ作品の形式的側面について (沼野恭子他編『国際シンポジウム「文化の汽水域：東スラヴ世界の文化的諸相をめぐって」報告集』5-13, 東京外国語大学, 2018年) ▼ ベラルーシの中のポーランド：バルシュチェフスキ・ミツキエヴィチ・ブルガーリン (関口時正、田口雅弘、吉岡潤編『ポーランドとその隣人たち2：フォーラム・ポーランド2015年会議録』20-25, ポーランド広報文化センター, 2017) ¶3 著書 ▼ (服部倫卓と共編著)『ベラルーシを知るための50章』356 (明石書店, 2017) ¶5 学会報告・学術講演 ▼ *Image of Belarusian Village War in Ales Adamovich's Literary Works, Workshop "Heu auf dem Asphalt. Topoi Belarussischer Selbstverortungen," University of Potsdam, Germany* (2018.1.19) ▼ *Chernobyl and Fukushima Disasters in Japanese Comics, Roundtable "Catastrophe and Modern Culture," The 49th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago* (2017.11.12) ▼ *Transgression of National and Religious Borders in Jan Barszczewski's "Belarusian" Literary Works, Panel "Beyond Borders: National and Social Transgression in East European Literature,"* 同上 (2017.11.9) ▼ *Влияние*

советского фильма в Китае: А зори здесь тихие… [ソ連映画の中国における影響: 朝焼けは静かなれど], Форум «Русскоязычная литература в процессе мировой литературы», Shanghai Normal University (2017.10.18) ▼ (田村容子と) Images of Female Soldiers in Russia and China: Chinese Acceptance of the Soviet Film *The Dawns Here Are Quiet*, Panel “Russian Elements in Asian Film,” The 8th International Symposium on European Languages in East Asia, Taiwan University (2017.9.30) ▼ Холерная эпидемия в романе «Бесов» Достоевского [ドストエフスキー『悪霊』におけるコレラ疫], Всероссийская научная конференция «Авраамиевская седмица», Smolensk State University, Russia (2017.9.19) ▼ 1930年代の日露作家の樺太/サハリン表象, 日本比較文学会ワークショップ「南北極域の比較文学: アイルランド、パタゴニア、樺太」, 山形大学 (2017.6.17) ▼ Memory of War in Belarus: Literary and Visual Texts, Panel “Intersection of Literary and Visual Texts in the Context of Russian and Soviet Culture,” The 8th East-Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies “Conflict and Harmony in Eurasia in the 21st Century,” Chung-ang University, Korea (2017.6.3) ▼ ドストエフスキーにおける病と火事, ドストエフスキー国際ワークショップ「ドストエフスキーにおける《病》の想像力, 名古屋外国語大学 (2017.3.10)

後藤正憲 ① 1 学術論文 ▼ Cutting through Channels: Local Entrepreneurship of Indigenous Actors in Arctic Russia (Veli-Pekka Tynkkynen, Shinichiro Tabata, Daria Gritsenko and Masanori Goto, eds., *Russia's Far North: The Contested Energy Frontier*, 162-172, London and New York: Routledge, 2018) ① 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 第9回北極社会科学国際会議報告『文化人類学』82(3):395-396 (2017) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Social Arrangement of Farm Management in Local Communities of the Republic of Sakha (Yakutia), ICASS IX., Umeå University, Sweden (2017.6.8) ▼ サハにおける農民(フェルメル)経営, 日本シベリア学会第3回研究大会, 新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」(2017.6.17) ▼ Toward Making of Teaching Materials for Environmental Education Related to Sakha Thermokarst, The 2nd Asian Conference on Permafrost (ACOP2017), Hokkaido University Conference Hall (2017.7.4) ▼ Interaction of Social and Natural Factors in Economic Activities of Contemporary Sakha Farmers, Fifth International Symposium on Arctic Research, Hitotsubashi Hall (2018.1.16)

斎藤慶子 ① 1 学術論文 ▼ バレエと政治: チャイコフスキー記念東京バレエ学校(1960-1964)と冷戦期のソ連の文化外交『境界研究』8:55-87 (2018.3) ▼ バレエ『まりも』(1962年)と社会主義リアリズム: アイヌにまつわる創作伝説のソヴィエト・バレエ化『民族藝術』34:123-129 (2018.3) ① 2 その他業績 (論文形式) (2) 研究ノート等 ▼ 一九世紀末ロシアにおける歌舞伎受容: バレエ『ミカドの娘』を例に(永田靖, 上田洋子, 内田健介編『革命ロシアと歌舞伎』269-282, 森話社, 2017) (5) その他 ▼ (コラム) 革命とバレエ: 古典的舞臺芸術の危機と再生(浅岡善治, 中嶋毅責任編集『ロシア革命とソ連の世紀 第4巻 人間と文化の革新』232-233, 岩波書店, 2017) ① 3 著書 ▼ (共編著)『舞踊年鑑』154(公益財団法人日本バレエ協会, 2018.3) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ ソヴィエト・バレエ教育改革とその日本への伝播, 第69回舞踊学会大会, 日本女子大学 (2017.12.2) ▼ Распространение советского балета за рубежом: на примере Токийской балетной школы имени П.И. Чайковского (1960-1964), International Seminar “BESEDA,” 早稲田大学 (2017.4.8)

仙石学 ① 1 学術論文 ▼ ポーランドにおける財政規律: 1997年憲法・3人の経済学者・トゥスクの功罪(西南学院大学法学部創設50周年記念論文集編集委員会編『変革期における法学・政治学のフロンティア』327-351, 日本評論社, 2017) ▼ Coping with a Declining Birthrate: Comparing Eastern Europe with Japan (仙石学編著, *The Great Dispersion: The Many Fates of Post-Communist Society* [スラブ・ユーラシア研究報告集11], 23-43, SRC, 2018) ▼ 2015 Parliamentary Election in Poland: Does the Migrant/Refugee Issue Matter?, *Journal of the Graduate School of Letters* (Hokkaido University), 13:35-47 (2018) ▼ 東欧におけるポピュリズムとネオリベラリズム: ヴィシェグラード諸国の事例から(村上勇介編『「ポピュリズム」の政治学: 深まる政治社会の亀裂と権威主義化』171-197, 国際書院, 2018) ① 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ Gyula Horváth, *Spaces and Places in Central and Eastern Europe* (Abingdon: Routledge, 2015), *Acta Slavica Iaponica*, 38:159-160 (2017) ① 3 著書 ▼ (編著) *The Great Dispersion: The Many Fates of Post-Communist Society* [スラブ・ユーラシア研究報告集11], 106 (SRC, 2018) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ 中東欧からみたロシア: 脅威かパートナーか, 一橋大学政策フォーラム平成29年度第3回「経済制裁下プーチンのロシア」(2018.1.19) ▼ (講演記録) 中東欧からみたロシア: 脅威かパートナーか『日本経済新聞』(2018.2.22)

高橋沙奈美 ① 1 学術論文 ▼ レニングラードの福者クセーニヤ: 社会主義体制下の聖人崇敬『宗教研究』91(3):25-48 (2017) ① 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ Социология религии

在 Японии [日本における宗教社会学] (M.Ю. Смирнов, ред., *Энциклопедический словарь социологии религии* [宗教社会学百科事典], 389-391, СПб.: Платоновское философское общество, 2017) (5) その他 ▼マイダン革命とウクライナ諸教会の社会貢献活動『宗教研究』91:161-163 (別冊要旨)(2017) ① 3著書 ▼『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観：社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナルリズム』456 (北海道大学出版会, 2018) ①5学会報告・学術講演 ▼A Forgotten Page of the Revolution: Taboo and Commemoration of the Tsareubiistvo (Regicide), The 8th East-Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies "Conflict and Harmony in Eurasia in the 21st Century," Chung-ang University, Korea (2017.6.3) ▼Social Activities of the Orthodox Churches after the Chernobyl Catastrophe, in ISSR/SISR 34th Conference "Religion, Cooperation and Conflict in Diverse Societies," Lausanne, Switzerland (2017.7.5) ▼マイダン革命とウクライナ諸教会の社会貢献活動, パネル「政教関係の国際比較と新しい公共宗教論をめざして」(代表者: 櫻井義秀), 日本宗教学会第76回学術大会, 東京大学 (2017.9.17) ▼革命を越えた祈り: 社会主義は「信仰」の形を変えたか (ロシア革命100周年企画), ソビエト史研究会2017年次研究大会, 専修大学サテライトキャンパス (2017.7.1) ▼忘却のチェルノブイリと記憶する正教, 2017年度「被災者参画による原子力災害研究と市民復興モデルの構築: チェルノブイリから福島へ」総括研究会 (基盤研究A) (2017.9.30-10.1) ▼ポスト社会主義圏における宗教の新しい形: ウクライナにおける危機と宗教, アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究, 北海道大学 (2018.2.10)

ティムール・ダダバエフ ①1学術論文 ▼"Silk Road" as Foreign Policy Discourse: The Construction of Chinese, Japanese and Korean Engagement Strategies in Central Asia, *Journal of Eurasian Studies* (Elsevier), 9:30-41 (2018) ▼Engagement and Contestation: The Entangled Imagery of the Silk Road, *Cambridge Journal of Eurasian Studies*, 2:1-15 (2018) ①3著書 ▼(Murod Ismoilov, Yutaka Tsujinaka と共編著) *Social Capital Construction and Governance in Central Asia: Communities and NGOs in post-Soviet Uzbekistan*, 188 (NY: Palgrave Macmillan, 2017.5)

田畑伸一郎 ①1学術論文 ▼(Tomoko Tabata と) Economic Development of the Arctic Regions of Russia (V. Tynkkynen, S. Tabata, D. Gritsenko and M. Goto, eds., *Russia's Far North: The Contested Energy Frontier*, 11-26 Abingdon, UK: Routledge, 2018) ▼ロシア北極域経済の現状: 地域財政の分析を中心に『ロシアNIS調査月報』63(3):10-20 (2018.3) ▼ロシアの大企業私有化と財政赤字『ロシアNIS調査月報』62(6):99-101 (2017.6) ▼底を打ったロシア経済: 2016年の成長と財政の実績『ロシアNIS調査月報』62(5):1-22 (2017.5) ①2その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼(インタビュー) 北極を知って地球を知る. 05 世界は北極域をどう見ているのだろうか? (情報・システム研究機構ブックレット1『北極を知って地球を知る』38-43, 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構, 2018.3) ①3著書 ▼(V. Tynkkynen, D. Gritsenko and M. Goto と共編) *Russia's Far North: The Contested Energy Frontier*, 252 (Abingdon, UK: Routledge, 2018) ①5学会報告・学術講演 ▼Economic Development of the Arctic Regions of Russia: Analysis of Regional Budgets, The Fifth International Symposium on Arctic Research (ISAR-5), Hitotsubashi Hall, Tokyo (2018.1.17) ▼Preliminary Analysis of Transfer from Federal to Regional Budgets in Russia, The 49th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago (2017.11.11) ▼(Tomoko Tabata と) Analysis on the State Budget of Russia in the Past Two Centuries, Second World Congress of Comparative Economics, Higher School of Economics in St. Petersburg (2017.6.17) ▼Observations on Regional Budget Performance of the Arctic and the Far East in Russia, The Second World Congress of Comparative Economics, Higher School of Economics in St. Petersburg (2017.6.15)

月村太郎 ①3著書 ▼(編著)『解体後のユーゴスラヴィア』304 (晃洋書房, 2017)

宍内勇津流 ①1学術論文 ▼第二次世界大戦期サハリン周辺海域の航行問題『ロシア史研究』99:3-26 (2017) ▼(E. A. パールィシェフと) "Архивная Россия" в Японии на примере личного фонда Куроки Тиканори [黒木親慶文書の例に見る日本における「ロシア文学」] *Вестник РГГУ. Серия "Документоведение и архивоведение. Информатика. Защита и информационная безопасность"* [ロシア国立人文大学紀要 ドキュメンテーション, 図書館学, 情報学, 情報の防御と安全編] 4:72-86 (2017) ①2その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼IFLA ヴロツワフ大会に参加して『図書館雑誌』111(12):799 (2017.12) ①5学会報告・学術講演 ▼Российский Дальний Восток после падения режима Колчака и внешнеполитический курс Японии в начале 1920 г., Международная научная конференция «Великая российская революция и Дальний Восток», 極東連邦大学, ウラジオストク (2017.10.25) ▼ニコラエフスク事件(1920年)再考, はこだて外国人居留地研究会札幌会, 藤女子大学, 札幌 (2017.12.19) ▼1920年4月4-5日沿海州武力衝突事件をめぐって, 第3回シベリア出兵史研究会, 早稲田大学

(2018.1.20) ▼ IFLA2017年ヴロツワフ大会に参加して, 大学図書館問題研究会北海道グループ特別例会, 北海道大学 (2018.2.17) ▼アレクサンドル・ポポフ (1820~1877) のカトリック論, プラトンとロシア研究会, 早稲田大学 (2018.3.16) ▼白鳥正明氏収集サハリ州国家文書館史料について, 日ソ戦争研究会, 東京経済大学 (2018.3.26)

長縄宣博 ㊦ 1 学術論文 ▼反帝国主義の帝国: イスラーム世界に連なるソヴィエト・ロシア (宇山智彦編『ロシア革命とソ連の世紀 第5巻 越境する革命と民族』179-203, 岩波書店, 2017) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼Биография Карима Хакимова: методика изучения СССР как «антиимперской империи» Часть 1 <<https://realnoevremya.ru/articles/67402-biografiya-diplomata-karima-hakimova-ot-yaponskogo-uchenogo>>; Часть 2 <<https://realnoevremya.ru/articles/67720-biografiya-diplomata-karima-hakimova-ot-yaponskogo-uchenogo>> (2) 研究ノート等

▼ (書評論文) Transimperial Muslims, the Modernizing State, and Local Politics in the Late Imperial Volga-Ural Region, *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*, 18(2):417-436 (2017) (5) その他 ▼ (和田春樹, 塩川伸明, 宇山智彦, 池田嘉郎, 松里公孝と) ロシア革命百周年記念討論会『ロシア史研究』99:26-61 (2017) ㊦ 3 著書 ▼『イスラームのロシア: 帝国・宗教・公共圏 1905-1917』427 (名古屋大学出版会, 2017) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Mutinous Intermediaries? Muslim Chinovniki in the 1905 Revolution, The 18th CESS Annual Conference, University of Washington, Seattle (2017.10.7)

▼ О роли Приволжской татарской стрелковой бригады в большевистском завоевании Средней Азии, ロシア史研究会大会「ロシア革命とはなんだったのか? 百年目に考える」, 東京大学駒場キャンパス (2017.10.1) ▼ “Connecting Wars, Regathering an Empire: The Role of Volga Tatars in the Bolsheviks’ Conquest of Central Asia”; (Kimitaka Matsuzato, Robert D. Crews と) “Roundtable: New Trends in Islamic Politics in Russia and Crimea: Ideology, Discourse, Institutions, and the Hajj Business,” The 49th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago (2017.11.10) ▼ Making an Anti-Imperialist Empire: Soviets’ Entanglements with Central Asia, Iran, and the Red Sea in the 1920s, Winter International Symposium of the SRC “The Russian Revolution in the Long Twentieth Century,” SRC (2017.12.7)

野町素己 ㊦ 1 学術論文 ▼ (Bojan Belić と) Banat Bulgarian and Bunyev: a Language Emancipation Perspective (Dieter Stern, Motoki Nomachi and Bojan Belić, eds., *Linguistic Regionalism in Eastern Europe and Beyond: Minority, Regional and Microliterary Languages*, 67-85, Bern: Peter Lang, 2018) ▼ (Bojan Belić と) Vojvodina’s Minority Languages in Light of a Language Emancipation Theory, *Balkanistic Forum*, 17(3):17-34 (2017) ▼ Another Look at the Rise and Fall of the West Polesian Literary Microlanguage (with a Glance Toward Less Discussed Ukrainian Factors) (Ljudmila Popovic, ed., *Ukrainian Studies and the Slavic World*, 264-283, Beograd: Apollo Plus, 2017) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等

▼「ベラルーシ語の言語学的特徴: 東スラヴ語群の一言語として」, 「ポレシエの民とその言葉: ベラルーシとウクライナの狭間で」(服部倫卓, 越野剛編著『ベラルーシを知るための50章』113-119, 142-146, 明石書店, 2017) ㊦ 3 著書 ▼ (Tomasz Kamusella, Catherine Gibson と共編著) *Central Europe Through the Lens of Language and Politics: On the Sample Maps from the Atlas of Language Politics in Modern Central Europe* [スラブ・ユーラシア研究報告集 10], 103 (SRC, 2017) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Evolution of the Existential Clauses in Kashubian, The 23rd International Conference on Historical Linguistics, San Antonio (2017.7.31.-8.4) ▼ Placing Kashubian in the Circum-Baltic (CB) Area and Beyond, The 49th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago (2017.11.9-12) ▼ Can the Gorani Language Be Planned? The Latest Sociolinguistic Developments in the Gorani Community of the Former Yugoslavia, Slavic Grad Colloquium, University of Washington (2017.11.17)

ブル・ジョナサン エドワード ㊦ 3 著書 ▼ (岩下明裕と共編著) *Positioning Asia and Kyushu in Shifting Global Politics* [スラブ・ユーラシア研究報告集 9], 54 (SRC, 2017) ㊦ 4 その他業績 (著書形式)

▼ (シンポジウム報告集) (加藤美保子と共編著) *There Goes the Neighborhood: Increasing Tensions in Cooperative Northeast Asia* [Northeast Asia Today Vol. 3], 51 (SRC, 2017.9) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Rethinking Post-imperial Migration from the Japanese Empire: The Case of Repatriation from Sakhalin (Karafuto) to Hokkaido, The 46th Global Japan Studies Seminar, 東京大学 (2017.12.11) ▼ Settling the Unsettled: History and Memory in the Construction of the Karafuto Repatriate (Lecture as recipient of 20th Century Japan Research Award), メリーランド大学, 米国 (2017.9.7) ▼ Weaponizing the Loss: Settling the Unsettled in Japanese Repatriate Narratives, The 15th European Association of Japanese Studies (EAJS) International Conference, 新リスボン大学 (2017.8.31)

松澤祐介 ① 1 学術論文 ▼非ユーロ圏の中央銀行と金融政策運営：チェコのユーロ導入をめがけて『西武文理大学サービス経営学部研究紀要』30:43-50 (2017) ①5 学会報告・学術講演 ▼Processes and Perspectives of Euro Adoption by Central European Countries, The Second World Congress of Comparative Economics, Higher School of Economics in St. Petersburg (2017.6.15) ▼Unanticipated Opt-Out: Central European Process to the Eurozone, II Kongresu Europeisty [Polish Congress of European Studies], Szczecin, Poland (2017.9.27)

みせらねあ

◆ シシキン教授 70 歳記念論集の刊行 ◆

1998 年度と 2011 年度にセンター外国人研究員を務めたウラジーミル・シシキン教授（ロシア科学アカデミー・シベリア支部歴史研究所）が 70 歳になられたことを記念する論文集が、ノヴォシビルスクで刊行されました。シシキン先生はシベリアを代表する歴史家の一人で、1920 年前後のソヴィエト政権の食糧政策の研究から出発して、シベリアにおけるソヴィエト国家建設の歴史を研究されたのち、パレストロイカの頃からは革命・内戦期の白軍側諸政権や内戦直後の反ソ反乱の研究に重点を移して、多くの業績を挙げられました。先生が編集した白軍側諸政権・反ソ反乱に関する浩瀚な史料集も、研究者にとって大変有益なものです。十月革命後のロシアをソヴィエト国家とは異なる方向に導く可能性のあった場所であるシベリアの複雑な状況の理解に、先生の仕事は大きく貢献してきたと言えるでしょう。



Shishkin 氏記念論集表紙

『ロシア史における人間・社会・権力 Личность, общество и власть в истории России』と題された記念論集は、ロシア、日本、アメリカ、ドイツ、イスラエルの研究者による、シベリア史に直接・間接に関わる 26 本の論文から成っており、対象時期は帝政期からソ連崩壊期まで幅広いですが、先生の専門である第一次世界大戦・革命・内戦期と 1920 年代が特に分厚い構成となっています。日本からは藤本和貴夫氏、松里公孝氏と宇山智彦が寄稿し、巻頭には、センターが先生に送った祝辞がロシア語と日本語で収録されています。少数での発行ですが、のちほどインターネット上で閲覧できるようになる予定とのことです。シシキン先生のご健康とますますのご活躍をお祈りいたします。[宇山]

◆ 高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観：社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』（北海道大学出版会、2018 年）の刊行 ◆

昨年度末、7 年前に提出してからほぼ放置していた博論を大幅に加筆・改稿して上梓することができた。出版に至るまでに、本稿に目を通して忌憚なくご批判を寄せてくださった先生方、諸兄諸姉に改めてお礼申し上げたい。ありがとうございます。以下、この場を借りて拙著の概要を紹介させていただきたい。

本書が取り上げたのは、後期社会主義時代（1953-85 年）のソヴィエト・ロシアにおいて、宗教文化財が表象した空間、すなわち「聖なる景観」である。無神論化という強制的な世俗



化を経験したロシアで、宗教的遺産がいかに関心され、どのような社会的役割を果たしたのか、表象と受容の問題を論じた。本書が明らかにすることを目指したのは、以下の三点である。

第一に、ロシアにおける「宗教」と「世俗」の振り分けについて。後期社会主義時代のロシアでは、それまで「宗教」の文脈におかれ、公共空間から排除されてきた文化財が、「世俗」的なまなざしで再評価されるという変化がおこった。この変化の過程を明らかにすることは、ソヴィエト・ロシアの経験をよりグローバルな「世俗化」の地平で比較検討するために重要な作業となる。

第二に、後期社会主義の時代のソヴィエト・ロシアを支配するイデオロギーとなった「ソヴィエト愛国主義」、そこに込められたロシア・ナショナリズムの問題がある。1920～30年代の文化革命の時代に破壊／放置された「過去の遺物」が、保護すべき「史跡・文化財」として再評価されたこと背景は、愛国主義／ナショナリズムの問題抜きに考えられない。愛国主義／ナショナリズムとは、後期社会主義時代のソヴィエト・ロシアにおいてどのようなものとして理解されていたのだろうか。宗教文化財を事例に考える。

第三に、宗教文化財の再評価に重要な貢献を果たした「公衆」の存在に光を当てた。「公衆」はソ連型の市民社会の祖型とも呼ぶべきもので、自発的な連帯によって形成されたが、党＝国家と協働して社会変革を目指す、人びとの緩やかな集まりであった。

本書の主要な軸のひとつである「宗教」については、後期社会主義時代の中に、「宗教」は一種の文化的資源へと変容を遂げ、広く流通したという考え方を採用した。その具体的相貌である宗教文化財は、ロシア社会のあらゆる局面で顔を出すソヴィエト愛国主義を背景に、急速に人びとを惹きつけた。愛国主義は、戦後のロシアを支配したメインカルチャーともいうべき存在で、大国主義、反ユダヤ主義、土壌主義、復古的なナロードへの賛歌などが複雑に絡み合う、多義的に解釈可能な曖昧な情念であった。この曖昧性に具体的な形を与えることができたのが、宗教文化財をシンボルとする「聖なる景観」だったのであり、排外主義的ナショナリストからリベラルなヒューマニストに至るまでの広範な社会層を惹きつけたことを論じた。

本研究にあたっては、宗教社会学、歴史学、文化人類学の手法を取り入れ、学際的なものとなることを意識したつもりである。ポストモダンの知的潮流が生み出した宗教研究の成果としての世俗化論再考や宗教概念に関する議論を生かしつつ、実証史学の手法を意識して、一次資料の分析を重視した。さらに、当時の人びとの生の声を採取し、内在的な言説分析を試みた。それによって、抑圧／抵抗、宗教／世俗、無神論／宗教、国家／教会、党＝国家権力／公衆(市民社会)といった社会主義体制を論じる際のさまざまな二項対立にとらわれない、柔軟な叙述を目指した。

ソ連解体後のロシア地域研究において宗教研究は極めて重要な研究分野のひとつとなったが、我が国では十分な関心が払われていないと言え難い。国際的な研究動向を踏まえて、本書は、ソ連時代の宗教が宗教組織や信者集団、それらを主要な対象とした宗教政策に限定されるものではないことを前提とした。その上で、愛国主義やナショナリズムなどのイデオロギーや消費文化と結びついた宗教文化財が、広範な人びとを動員可能にする重要な文化資源となっていたことを明らかにした。さらに我が国のソ連史研究においては、その帝國的な性格の分析が重視され、少数民族や周辺地域に関する研究が主流となっているが、一方でロシア民族のソ連愛国主義／ロシア・ナショナリズムに関する具体的な事例を踏まえた研究が乏しい。本書がその空隙を埋めるものとなることを願っている。[高橋沙奈美]

◆ センターの役割分担 ◆

2018年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。[仙石]

センター長.....	仙石
副センター長.....	田畑
拠点運営委員会委員.....	岩下／宇山／仙石／田畑／野町

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会.....	仙石
教務委員会.....	仙石
図書館委員会.....	岩下
国際担当教員.....	ウルフ
欧州ヘルシンキオフィス所長.....	田畑
RJE3 学内運営委員会.....	田畑
低温科学研究所拠点運営委員会.....	仙石
北極域研究センター運営委員会.....	田畑
外国人招へい教員候補者選考委員会.....	仙石
全学運用教員審査会.....	仙石
男女共同参画委員会.....	仙石
社会科学実験研究センター運営委員会.....	田畑
ハラスメント予防推進員.....	岩下
広報担当者.....	野町
男女共同参画委員会企画調査専門委員.....	宇山
過半数代表者.....	長縄
サステナブルキャンパス推進員.....	安達

【学外委員会等】

国立大学附置研究所・センター長会議.....	仙石
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会.....	仙石
JCREES 事務局.....	仙石／高橋(沙)
地域研究コンソーシアム理事.....	仙石
地域研究コンソーシアム運営委員.....	安達／油本
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員.....	宇山
京都大学東南アジア地域研究研究所運営委員.....	岩下
ICCEES 情報.....	野町

【センター内部の分担】

大学院講座主任.....	宇山
教務委員.....	長縄
入試委員.....	(前期) 岩下／(後期) 仙石
総合特別演習担当.....	(前期) 岩下／(後期) 田畑
全学教育科目責任者.....	長縄
全学教育科目総合講義.....	宇山
全学教育科目演習.....	長縄
将来構想.....	岩下／宇山／田畑／長縄／野町
点検評価.....	田畑／長縄

夏期シンポジウム.....	田畑／菊田／高橋 (美) ／後藤
冬期シンポジウム.....	野町／油本／高橋 (沙)
図書.....	岩下／兎内
情報・広報.....	野町／菊田／大須賀
予算.....	田畑
共同利用・共同研究公募.....	田畑
客員教員.....	田畑
外国人研究員プログラム.....	宇山／ウルフ／大須賀
ヴィヘルケヴィッチ、トマシュスタニスワフ 2018.7.17-2019.2.15.....	野町
ウォードロン、ピーター 2018.9.18-2018.11.18.....	長縄
アピケエヴァ、グルナラ オイラトヴナ 2018.10.1-2019.2.1.....	宇山
クダイベルゲノヴァ、ディアナ 2019.1.4-2019.3.29.....	宇山
非常勤研究員.....	岩下
中村・鈴川基金.....	岩下
公開講座.....	田畑／高橋 (沙) *
公開講演会.....	長縄／油本*／大須賀
専任研究員セミナー (助教・非常勤研究員を含む).....	田畑
その他研究会・講演会.....	安達／油本*／大須賀
研究所一般公開.....	菊田*
サマーインスティテュート.....	加藤／ブル
博物館.....	加藤／ブル
NIHU 北東アジア (HP、オンライン報告書).....	加藤
UBRJ (HP、『境界研究』、 <i>Eurasia Border Review</i>).....	岩下／ブル
その他諸行事企画.....	安達／高橋 (沙) *
雑誌編集委員会.....	安達／宇山／ウルフ／長縄／野町
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	野町／ウルフ／大須賀
『スラヴ研究』.....	長縄／大須賀
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集.....	安達／大須賀
ニューズレター和文 (メルマガ・HP コンテンツ).....	宇山／ (仙石) ／大須賀
ニューズレター欧文 (メルマガ・HP コンテンツ).....	ウルフ／ (仙石) ／大須賀

2018年4月1日現在。

*助教3人で担当するなかでの代表者を示す。

◆ 人物往来 ◆

ニュース 152号以降のセンター訪問者 (客員、道央圏を除く) は以下の通りです (敬称略)。
[仙石／大須賀]

- 2月10日 天野尚樹 (山形大)、中山大将 (京大)
- 2月13日 Andrei Popov (ロシア国立人文大)、Eduard Baryshev (筑波大)
- 2月15日 川島京子 (早稲田大)
- 2月19日 吉村貴之 (早稲田大)
- 2月21日 秋田茂 (大阪大)、河西晃祐 (東北学院大)、小沼孝博 (東北学院大)、平野千果子 (武蔵大)、前川一郎 (創価大)
- 3月3日 阿部賢一 (東京大)、井上暁子 (熊本大)、三谷研爾 (大阪大学)
- 3月5日 齋藤竜太 (筑波大・院)

- 3月 6日 関口高史 (防衛大)
3月 7日 Ljubica Jovanovic (アメリカン・パブリック大、米国)、服部文昭 (京大)、三谷恵子 (東京大)
3月13日 上垣彰 (西南学院大)
3月19日 Nikita Bochkarev (ヤクーツク科学センター、ロシア)、Tuyara Gavril'eva (北東連邦大、ロシア)
3月20日 藤沢潤 (神戸大)
3月22日 志摩園子 (昭和女子大)
3月27日 菅沼桂子 (日本大)
4月 1日 黒岩幸子 (岩手県立大)
4月 2日 ロマン・ツィルレフ (ハイデルベルク大、ドイツ)、木村崇 (京大)
4月 5日 洪鐘和 (民俗苑、韓国)
4月19日 Emmanuel Brunet-Jailly (ヴィクトリア大、カナダ)
4月26日 田中利和 (東北大)

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は、2月14日～3月15日の間、ヘルシンキオフィス運用業務及び大学交流デー実施業務のため、フィンランド、スウェーデンに出張。

長縄宣博研究員は、3月10～26日の間、史料調査のため、ロシアに出張。

山村理人研究員は、3月12～24日の間、調査及び資料収集のため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は、3月21日～4月1日の間、研究打合せ、資料収集及び“Russia's North Pacific between Imperialism and Globalization. Institutions and Spaces”出席、研究報告、意見交換のため、ドイツ、ロシアに出張。

野町素己研究員は、3月14～25日の間、カナダオンタリオ州のカシュプ人の言語調査のため、カナダに出張。4月11～21日の間、BASEES 2018 Annual Conferenceへの出席、研究発表、研究打合せ、セント・アンドリュース大学研究セミナーでの講演及び資料収集のため、英国に出張。4月24日～5月2日の間、講演会“The Kosovan Gorani Ethnolect: A Borderland Enclave in Search of Linguistic Identity”および“Language Emancipation of Slavic Microlanguages: A Comparative Case Study”での講演、共著論文の執筆のため、米国に出張。

仙石学研究員は、3月23～29日の間、資料収集のため、ポーランドに出張。

宇山智彦研究員は、3月29日～4月4日の間、“Mobilizing Academic Communities in Central Asia to Produce New Knowledge about the 1916 Uprising and to Build Shared Academic Platforms for Exchanging and Disseminating Knowledge about Ethnically or/and Politically Sensitive Topics”プロジェクト第1回ワークショップ出席、研究報告のため、キルギスに出張。

岩下明裕研究員は、4月2～9日の間、資料収集、“WSSA 60th 年次集会”出席、研究報告のため、米国に出張。[事務係]

目 次

研究の最前線.....	1
2018 年度夏期国際シンポジウム《移りゆく北極域と先住民社会：土地・水・氷》 開催予告／【参加レポート】2018 年 ABS サンアントニオ大会終了／共同研究 員／公開講座「ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題」開講／ラー ダ・ピラニユク氏の滞在／研究会活動	
人事の動き.....	6
山村理人教授：定年退職／越野剛准教授：退職／安達大輔氏の就任／非常勤研 究員紹介／2018 年度の客員教授・准教授／事務職員	
スラブ・ユーラシア研究センター：ポスト共産主義諸国の専門家のための知の拠点 by イリヤ・ヴィクトロフ.....	8
忘れられない、驚くべき日本：研究者の覚え書き by アジム・マリコフ.....	10
日ソ合作のオペラ《光太夫》——ロシア初演へ by 神竹喜重子.....	12
学界短信.....	15
学会カレンダー	
大学院だより.....	15
学際的な地域研究の拠点 by 服部倫卓.....	16
「スラ研」について by 秋月準也.....	18
図書室だより.....	19
最近の受入資料から	
編集室だより.....	21
Slavic Eurasian Studies No. 33 <i>Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order</i> , Uyama Tomohiko, ed. の刊行／『境 界研究』第 8 号の刊行／ <i>Eurasia Border Review</i> 8(1) の刊行／『スラヴ研究』／ <i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議（2018 年 2 月）.....	24
センター協議員会	
誰が何をどこで.....	24
みせらねあ.....	31
シシキン教授 70 歳記念論集の刊行／高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる 景観：社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』（北海 道大学出版会、2018 年）の刊行／センターの役割分担／人物往来／研究員消息	

2018 年 6 月 4 日発行

編集	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
